

2022 (令和4) 年度

千葉県 NIE 実践報告書

(*Newspaper in Education* = 教育に新聞を)



市川市立宮久保小学校
習志野市立津田沼小学校
野田市立北部小学校
酒々井町立酒々井小学校
長柄町立長柄小学校
市川市立鬼高小学校
香取市立佐原小学校
船橋市立芝山東小学校
白井市立白井第一小学校
鴨川市立天津小湊小学校
横芝光町立日吉小学校
千葉市立磯辺第三小学校
香取市立新島中学校
千葉市立新宿中学校
市原市立市原中学校
松戸市立河原塚中学校
千葉県立国府台高等学校
千葉県立四街道北高等学校
千葉県立土気高等学校

千葉県 NIE 推進協議会

ご挨拶



千葉県NIE推進協議会会長

藤川大祐
(千葉大学教育学部長・教授)

平素より、千葉県NIE推進協議会の活動に対して多くの方々にご協力いただき、ありがとうございます。2022年度のNIE実践報告書をこうしてお届けできることとなり、関係の皆様のご尽力に深く感謝しております。

2022年度は、世界も日本も大きく動いた一年でした。ロシアによるウクライナ侵攻が長期化し多くの犠牲者が出るとともに、エネルギー価格や食料価格の高騰という問題も生じました。新型コロナウイルスに関してはオミクロン株による感染者増大等があり、影響が続いています。安倍晋三元首相が暗殺された事件は、民主主義を守る必要性和カルトの危険性を印象づけました。ChatGPT等のAIの利用が急速に広まり、人間とAIとの関係があらためて問われています。サッカーのワールドカップや野球のワールド・ベースボール・クラシックといったスポーツの国際大会に人気が集まり、参加国のスポーツ事情が注目されることもありました。

また、日本においては、こども基本法が成立し、こども家庭庁の発足が決まり、さらには政府から「異次元の少子化対策」が打ち出される等、子どもの権利に関わる話題がこれまで以上に多くなりました。学校での1人1台端末が定着したこともあり、子どもが意見を表明したり、情報にアクセスしたり、有害情報から守られたりすること等、情報に関わる子どもの権利は、これまで以上に注目される必要があります。

さらに、日本では2022年4月からは成人年齢が引き下げられ、高校3年生の学年で多くの人が成人年齢に達することとなりました。このことは、中等教育が終わることを待たずに、高校生が一人前の判断能力を身につけなければならなくなったことを意味しています。

こうした状況において、児童生徒の情報活用能力やデジタル・シティズンシップを高める教育のあり方が、ますます問われるようになっていきます。インターネット上で話題になることの多くが新聞を情報源としていることを踏まえれば、どのように児童生徒がこの社会の基幹的な情報インフラである新聞について理解し、新聞を活用できるようにするかが、ますます重要な課題となっています。

社会の変化とともに、新聞は少しずつ形を変えてきました。NIEも、少しずつ形を変えながら、社会の要請に応える形で発展していくことが必要です。NIEに集う教育関係者や新聞関係者が連携協力してこれからの時代に必要な教育をデザインし、多くの児童生徒に豊かな学習を提供していきましょう。

目 次

小学校

市川市立宮久保小学校	1
習志野市立津田沼小学校	3
野田市立北部小学校	5
酒々井町立酒々井小学校	7
長柄町立長柄小学校	11
市川市立鬼高小学校	15
香取市立佐原小学校	16
船橋市立芝山東小学校	19
白井市立白井第一小学校	21
鴨川市立天津小湊小学校	24
横芝光町立日吉小学校	28
千葉市立磯辺第三小学校	30

中学校

香取市立新島中学校	33
千葉市立新宿中学校	37
市原市立市原中学校	39
松戸市立河原塚中学校	42

高等学校

千葉県立国府台高等学校	44
千葉県立四街道北高等学校	47
千葉県立土気高等学校	50

NIEを通して生きる力をはぐくむ

～社会と自分をつなげる新聞～

市川市立宮久保小学校 石川 剛士

1 はじめに

市川市では、毎朝4年生以上の各学級に新聞を届けてもらっている。読売新聞と朝日新聞が各学級に届くため、最新のニュースを知ることができるし、読み比べをすることもできる。その恵まれた環境を生かして、教育活動にあたりたい。本校ではクラスごと必要に応じてNIE活動を行っている。新聞づくりでは、国語、総合などの教科で活動の振り返りやワークシートとしての活用を行った。新聞活用では、投書をもとに自分の考えを書いたり、見出しを考えたりする活動を行った。令和4年度のNIEの実践を振り返り、今後の教育活動に生かしたい。

2 実践状況

①新聞づくりの活動

I、体育科 運動会新聞 (A4版)

運動会での学びをA4版の新聞で振り返った。種目ごとにまとめ、自分の考えたことなども入れ、工夫した作品に仕上がった。

II、国語 きつねの窓

B4サイズワークシート新聞

新聞型のワークシートにし、1時間に1記事ずつ作成していき、学習が終わると完成しているようにした。学習が一覧で振り返ることができ、完成度も高かったの、児童も満足した様子だった。

III、総合的な学習の時間

修学旅行新聞 (B4版)

1年間の学習の集大成として、意欲的に取り組んだ。修学旅行での学びをまとめた作品。

IV、国語 偉人まとめ新聞

国語科「伊能忠敬」の学習のまとめとして、自分の好きな偉人についてのまとめをA5で1枚、それに対する自分の学びとこれからへの決意をA5で1枚書き、合わせてA4ファイルへとクラス全員分をファイリングし、偉人辞典とした。

②新聞活用の活動

I、新聞記事をもとに自分の意見をアウトプットする活動

教師が気になった記事をスクラップし、ワークシート化する。それに対する考えを記述する活動。1モジュール15分間で行い、できた児童のものから時間内いっぱいまで、書いた文章を読み上げていった。友達の意見を興味深そうに聞く児童が印象的だった。

II、国語 自分の考えを発信しよう

朝日、読売の新聞の投書をみんなで切り抜き、興味のある内容の記事を1つ選ぶ。それに対する自分の考えを書く学習である。とくに学生の書いた投書は人気が高かった。



3 成果と課題

- 子どもたちの書く力が向上した。文章力と構成、要約、レイアウト、デザインなどをする力も付き、学習したことをノートにまとめるときなどにも、苦勞することなくできるように成長した。
- 市内学校新聞展で、学校新聞の部では最優秀賞、学級新聞の部では優秀賞に輝いた。
- 投書に対して何度も自分の意見を書くことで、社会の出来事に対して、自分の意見を持つことが容易になった。
- 年間の学習計画の中に計画的に配置し、ほかの活動に支障が出ないようにする必要がある。
- 学年内で足並みをそろえて、活動を共有していく。
- 学校内で活用の仕方や、指導の仕方を共有していく。



4 まとめ

令和4年度も数多くのNIE実践を行うことができた。また、新聞づくりにおいては、多くのクラスが力をつけ、コンクール等で評価してもらうことができた。しかし、まだまだ、届いた新聞を生かしきれないことも多い。年間の学習計画の中で、無理なく、だれにでも取り組みやすい実践を考案していく必要性を感じる。そして、子供たちに必要な力、得られる力を明確にして次の時代を担う力を養っていきたい。



新聞に親しみ、伝えたいことが届く 文章を書く力の育成を目指して

習志野市立津田沼小学校 金井 達也・北本 陸・村松 由季代

1 はじめに

本校は、令和2年度からNIE推進校の指定を受けている。3年目となる本年度は、本校の児童の「書く力」を伸ばすために、新聞記事の内容を取り上げたり、新聞記事で学習をまとめたりするなどの取り組みを行った。本校では、全国学力・学習状況調査の結果をもとに、児童の書く力を伸ばすことを目指しており、本実践が児童の書く力の向上に繋がるだろうと考えたためである。本報告では、5年生の取り組みを中心にまとめていく。

2 実践内容

(1) 新聞記事を読んで自分の考えをまとめる活動

本校に年間を通して届く朝刊新聞を活用し、記事を読んで初めて知ったことや考えたことを二段落の文章にまとめる活動を行った。さらに、書いた文章は学級の友達と読み合った後に教師が回収し、二段落構成で書くことや、正しい文章表現を使うことなどについて添削した。



東日本大震災に関する記事を読んで自分の考えをまとめる作文



新聞を読んで気が付いた新聞の魅力についてまとめる作文

(2) 学習内容を新聞形式にまとめる活動①

新聞を読むだけでなく、学習の整理をするために、学習した内容を新聞形式でまとめる活動を行った。国語の学習では、見出しやリード文などの新聞の構成を意識し、多くの人に内容が正確に伝わるようにと指導をした。また、前期は新聞の割り付けが決まっているプリントを使い、後期は割り付けも自分で行うようにした。

「新聞を読もう」の学習において、新聞の仕組みについて調べる学習に取り組んだ。その際に、本校に届いた朝刊新聞を資料として使用し、新聞記事を読み比べたり、内容や見出し、写真などについて気付いたことを発表し合ったりした。

2月に国語「まんがの方法」の学習において、新聞記事に記載している4コマ漫画「コボちゃん」を活用して、日本の漫画が世界に親しまれている理由や作者の工夫について学習した。新聞記事の一部を切り取り、ポップづくりを通して説明することを学級で共有することができた。



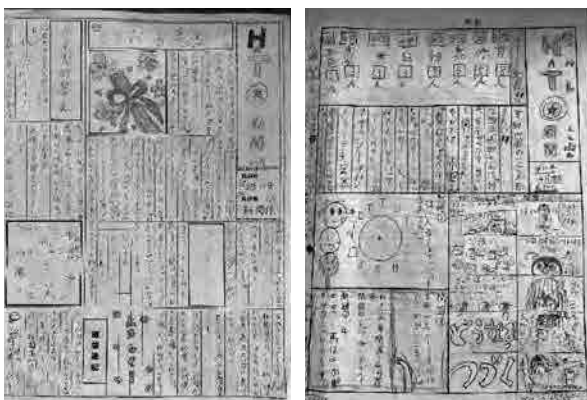
(3) 学習内容を新聞形式にまとめる活動②

社会科の学習では、日本の産業について学習した内容や、校外学習などで体験したことなどを新聞形式にまとめる活動を行なった。



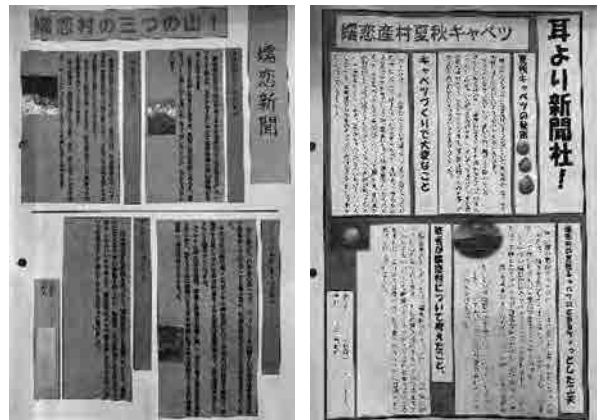
読み手を惹きつけるように見出しを工夫する児童が多く、読み手にとって分かりやすい文章を書こうと心がけることができた。また、学習内容を新聞形式にまとめる活動によって児童の思考も整理され、学習の締めくくりとしても活用した。

授業で学習したことを活かし、係活動「新聞係」としてクラスの出来事やアンケート、クイズなど学級の友達が楽しんで見てもらえるような記事を考え、掲示する姿が見られた。



3 おわりに

自分の気になるニュース記事を選んだり、友達の手紙や書いた文章を読んだりすることで、日々のニュースに対する関心を高めることができた。新聞記事を読んで自分の考えをまとめる活動では、興味のある記事を熱心に探す姿が見られ、新聞記事に触れる機会が多くなった。



孺恋村について調べ、自分達でリード文などの構成を意識して作成した

新聞記事には、記事の内容を短い言葉でまとめた見出しや、本文の大体の内容を短い文章でまとめたリード文、新聞社の見方や考え方を主張した社説などがある。それらを読んだ上で記事に対する感想を書くことは、児童の語彙を増やし、自分の考えを整理して書く力を伸ばすことにつながった。新聞を資料として提示することで、トップ記事が最も大切な記事であることや、写真が記事の内容に関係する事柄をより詳しく伝えるために載せてあることなどを、児童自身が気付くことができた。

NIE学習への取り組みとその成果

野田市立北部小学校 宇田川 貴大・中村 瞳

1 はじめに

本校では、令和2年度より校内研究として国語科に焦点を当て、研究主題を「自分の考えや思いを自ら表現できる児童の育成」と設定した。児童が主体的に表現するための授業改善や、相手意識を持った言語活動の開発を重点目標に掲げ研究を進めてきた。

また自らの考えや思いを主体的に表現するために必要な能力の育成を目的とし、NIE学習に取り組んだ。全児童に年間約6回、新聞を購入し児童の発達段階に応じて様々な実践を行った。



2 実践状況

<低学年の活動>

低学年では、初めて新聞を手にする児童が多かった。特に1年生は自分の顔より大きな紙をめくることが大変な作業になるので、めくり方、読み方、紙面のつくりから丁寧に指導した。新聞の読み方がわかってきたら、文字や写真をじっくりと見る活動をするためカタカナ探し、写真集めを行った。想像力を育むため、写真に吹き出しをつけてどのようなことを言っているのかを書く活動も行った。10月以降には、新聞記事を担任が読み記させ、見出しを切り取って、自分の考えを書く活動を行った。気になる



文字や写真を集めたり、記事を読んで簡単な感想を書いたりした。これらの実践を通して、児童が新聞に親しみ、記事を読んだり、伝えたいことは何かを想像したりする力が養われてきた。

<中学年の活動>

中学年では、記事の読み方を昨年度も行っているため、漢字集めや熟語集めを行った。記事で使用されている熟語の意味を調べ、実際にその熟語を使って短文づくりを行った。児童は自分が知らなかった熟語を知るよいきっかけとなった。また、いろいろな見出しを見つけることで見出しの効果について考えた。



<高学年の活動>

高学年では、中学年の内容に加え、自分の考えをもつこと、さらに疑問を持ったことを調べ、まとめる活動を行った。記事に書かれた事実から関連する事項を調べていくことで、さらに自分の考えを深めることができた。また、ワークシートに書いたことをもとに児童同士で意見を述べ合うことで多様な意見を知るとともに自分の考えを再構築する機会になった。

また今年度、第5学年では、国語科と総合的な学習の時間の合科を行った。SDGsの17の目標について学び、実行するため、学習の中で新聞を活用した。

加えて、昨年に引き続き、日直が毎日の新聞から気になった記事を切り抜き、見出しを付けて掲示をしたり、帰りの会で紹介したりする活動を行わせた。取り扱った新聞の中には、一般家庭ではなかなか購入しない経済新聞や工業新聞などもあり、新しい知識を知り、友達同士広めるよい機会となった。



3 成果と課題

年度末に児童に意識調査を行ったところ、新聞が学校で配られることで新聞を読む機会が増えたと回答する児童が多い結果となった。NIE学習に全校で取り組んだことにより、児童が新聞に慣れ親しむ機会を提供できたと考えられる。また今後もNIE学習に取り組みたいという意見を持った児童は、1～5年生で75パーセント以上、6年生は65パーセント以上おり、児童がNIE学習に意欲的に取り組んでいた。

また新聞は、常に最新の情報を得ることができるのが最大のメリットだと実感した。日常に取り入れていくことで常に新聞に触れる環境がくれたため、最初は難しく感じていた児童も手に取る回数が増えた。高学年になると自分の考えに対する裏付けがあることで説得力が増すため、新聞記事の数値やグラフが根拠として非常に重要な役割を果たした。

課題として、学校以外で新聞を意識して新聞を読む児童がまだ少ないため、そのような児童を増やすための取り組みが必要である。



ふるさと学習を通じた主権者教育の推進 ～新聞活用による児童の主権者意識の育成～

酒々井町立酒々井小学校 藤川 敬介
酒々井町教育委員会 一場 郁夫

1 はじめに

2016年に改正公職選挙法が施行され、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられたことを契機に、主権者意識を培う視点から、多くの自治体が、「子ども議会」を行うようになった。酒々井町でも2016年度から、ふるさと学習(酒々井学)の一環として、小学生も参加する「こども模擬議会」を開催している。その中で、まちづくりプランの作成に新聞活用を導入している。

2 ふるさと学習「酒々井学」

平成29(2017)年度から町教育施策の事業で、町の地域的な特色としての歴史・文化・自然や自分たちの生活環境等を素材として、児童生徒が主体的に郷土について学習する「ふるさと学習」(以下、酒々井学)を導入し、自分たちが暮らしている郷土を愛する心の涵養を図っている。

酒々井学とは、町の地域素材を使い、教科等の学習内容と関連づけて実践する地域学習・活動である。町の歴史・文化・自然等について知ることで、郷土に対して愛着と誇りを持ち、町民としてのふるさと意識を育むことをねらいとしている。

3 主権者教育

主権者とは、自分たちは社会に生かされているという受動的な意識から、自分たちが社会をつくっているという主体的な意識をもって社会に参画する者である。そして、主権者教育とは、国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者を育成していくことである。

この実践の下地にあるものが、「ふるさと意識」で

ある。まずは、自分が暮らす町に対して「自分の町」であるという所有格(Myまち・Ourまち)の意識を育むことが基本となる。この児童の所有格意識を基本にして学習することで、町の問題を自分ごととして捉え、よりよいまちづくりプランについて、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者を育成することにつながっていく。酒々井町では、この所有格意識を育むふるさと学習を通じた実質的な主権者教育を推進している。

4 実践状況(小学6年「酒々井のまちづくり」)

(1) 社会科(政治学習)(7月)

小学校学習指導要領第6学年社会科の内容では「国や地方公共団体の政治は、国民主権の考え方の下、国民生活の安定と向上を図る大切な働きをしていることを理解すること」とある。これを踏まえ、酒々井学プログラム「酒々井のまちづくり」では、主権者教育と関連づけて、児童が暮らす町の生活環境の現状に対して関心を持ち、町民としての視点と参画意識に基づいた、主体的な学習活動を展開できるようにした。学習は、社会科の単元「わたしたちの生活と政治」と関連づけて、導入段階において、「町民の願いはどのように実現されるのだろうか」という学習問題で始めた。

(2) 町役場との連携(7月)

企画財政課の職員が、児童に対して公共施設「プリミエール酒々井」(町立図書館)の建設の経緯について説明し、町民の願いを実現するための行政の仕組みについて解説した。次に、酒々井町総合計画を提示して、行政のまちづくり計画についても説明した。

児童は、暮らしと行政の関わりを知ること、自分たちの身近な生活環境を調べようとする目的意識を持つことができた。

そして、学習問題「酒々井町は、町民にとってくらしやすい町だろうか」を設定した。児童は、町の様子を想起して、予想「くらしやすい・くらしにくい」を立て、各自の予想を確かめる証拠(根拠)となる資料を収集する問題解決的な学習に取り組んだ。

(3) 新聞活用における多面的・多角的な視点

これまでに児童が作成したまちづくりプランは、当然のことながら自分たちの身近な生活圏である学校、通学路、公園といったテーマが多かった。

そこで、児童の視野を広げるために、新聞記事の活用やSDGs(持続可能な開発目標)の視点を導入した(図1・2)。これは、新聞(県内版)の身近な他自治体のまちづくりに関する記事を参考にしたり、SDGsの視点で町の環境を見直したりする調査活動である。この調査内容を基に町行政の取組について、町の広報紙やWEBで確認したり、役場に直接質問したりする。この活動により、児童は多面的・多角的な視点でまちづくりについて考えられるようになった。



図1 教室に掲示した新聞記事

新聞記事は、8社の新聞に掲載された千葉県内の自治体や民間団体等のまちづくりに関する記事を、

「行政・環境・教育・生活・観光・産業」の6つのテーマに分類して、掲示資料とした。



図2 新聞記事を調べる児童(NIE活用)

酒々井のまちづくり	NIE活用マニュアル												
<p>★「まちづくり」は、他のまちの様子や取組を知って、広い視野(県外・県外)で考えることが大切です。新聞記事はそのヒントをくれる大切なアイテムの一つです。</p>													
<p>1. 記事の説明</p> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>A 朝日新聞</td> <td>Y読売新聞</td> <td>M毎日新聞</td> <td>T東京新聞</td> </tr> <tr> <td>N 日本経済新聞</td> <td>S産経新聞</td> <td>C千葉日報</td> <td>K日刊工業新聞</td> </tr> </table>		A 朝日新聞	Y読売新聞	M毎日新聞	T東京新聞	N 日本経済新聞	S産経新聞	C千葉日報	K日刊工業新聞				
A 朝日新聞	Y読売新聞	M毎日新聞	T東京新聞										
N 日本経済新聞	S産経新聞	C千葉日報	K日刊工業新聞										
<p>2. テーマの説明</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td> <p>行政・・・役所(役場)で市長(町長)の生活をささげるための取組を行うこと</p> <p>環境・・・生き物などのまわりの場所や人間の生活の場所(自然環境・生活環境・SDGs)</p> <p>教育・・・学校や施設などが集まるところに教育者(先生)がいて、子供(児童)が学ぶこと(学校・公民館・博物館など)</p> <p>生活・・・人間が生活していくために必要なこと(食べ物・水・電気・ガス・安全・交通など)</p> <p>観光・・・まちの自然、歴史や文化などをよき観光に役立てること</p> <p>産業・・・まちの特色ある産業や職能や工業などを広げていくこと</p> </td> </tr> </table>		<p>行政・・・役所(役場)で市長(町長)の生活をささげるための取組を行うこと</p> <p>環境・・・生き物などのまわりの場所や人間の生活の場所(自然環境・生活環境・SDGs)</p> <p>教育・・・学校や施設などが集まるところに教育者(先生)がいて、子供(児童)が学ぶこと(学校・公民館・博物館など)</p> <p>生活・・・人間が生活していくために必要なこと(食べ物・水・電気・ガス・安全・交通など)</p> <p>観光・・・まちの自然、歴史や文化などをよき観光に役立てること</p> <p>産業・・・まちの特色ある産業や職能や工業などを広げていくこと</p>											
<p>行政・・・役所(役場)で市長(町長)の生活をささげるための取組を行うこと</p> <p>環境・・・生き物などのまわりの場所や人間の生活の場所(自然環境・生活環境・SDGs)</p> <p>教育・・・学校や施設などが集まるところに教育者(先生)がいて、子供(児童)が学ぶこと(学校・公民館・博物館など)</p> <p>生活・・・人間が生活していくために必要なこと(食べ物・水・電気・ガス・安全・交通など)</p> <p>観光・・・まちの自然、歴史や文化などをよき観光に役立てること</p> <p>産業・・・まちの特色ある産業や職能や工業などを広げていくこと</p>													
<p>3. 新聞資料の見方</p> <p>① 自分が興味を持ったテーマを見つけよう!</p> <p>② テーマにある新聞の見出しを読み、関心を持った新聞記事を選んでコピーしよう!</p> <p>③ 必要な情報を記入しよう!</p> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>新聞社名</td> <td>()</td> <td>1 2 3 4 5 6 7 8 9</td> <td>10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20</td> <td>21 22 23 24 25 26 27 28 29 30</td> <td>31 32 33 34 35 36 37 38 39 40</td> </tr> <tr> <td>記事の見出し</td> <td>()</td> <td>1 2 3 4 5 6 7 8 9</td> <td>10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20</td> <td>21 22 23 24 25 26 27 28 29 30</td> <td>31 32 33 34 35 36 37 38 39 40</td> </tr> </table> <p>④ コピーした新聞記事に、わからない言葉や大切な言葉をマーカーで囲んでみよう!</p> <p>⑤ マーカーを引いたわからない言葉は辞典などで調べよう!</p> <p>⑥ くわしく知りたい場合は、新聞記事の情報を電話やインターネットを使って調べよう!</p> <p>⑦ 自分のまちではどうなのかな、まちづくりの視点を自分のまちの様子を見てみよう!</p> <p>⑧ 自分が見たまちの様子について、役場(行政)での取組を町のWEBや広報紙等で調べよう!</p> <p>⑨ 自分で見たまちの様子と役場の取組から、自分で考えたまちづくりプランを作成しよう!</p>		新聞社名	()	1 2 3 4 5 6 7 8 9	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	31 32 33 34 35 36 37 38 39 40	記事の見出し	()	1 2 3 4 5 6 7 8 9	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	31 32 33 34 35 36 37 38 39 40
新聞社名	()	1 2 3 4 5 6 7 8 9	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	31 32 33 34 35 36 37 38 39 40								
記事の見出し	()	1 2 3 4 5 6 7 8 9	10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20	21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	31 32 33 34 35 36 37 38 39 40								

図3 NIE活用マニュアル

NIE活用マニュアル(図3)は、新聞資料の見方として活用する。①自分が興味を持ったテーマを見つける。②テーマにある新聞の見出しを読み、関心を

持った新聞記事を探してコピーをする。

- ③必要な情報を記入する。④コピーした新聞記事にわからない言葉や大切な言葉をマーカーで色分けする。⑤マーカーを引いたわからない言葉は辞典などで調べる。⑥詳しく知りたい場合は、新聞記事の情報から電話やインターネットを使って調べる。⑦自分の町の現状について、町づくりの視点で観察する。⑧自分が見た町の様子について、役場(行政)での取組を町のWEBや広報紙等で調べる。⑨自分で見た町の様子と役場の取組から自分で考えた「まちづくりプラン」を作成する。

(4) 町の生活環境調査(夏季休業中の課題)

児童は日常の生活環境でのよい所や困る所に気付いて、町の暮らしの改善点を考えた。次に、行政サイトで場所の確認ができるように、調査地点が分かる地図を描き、状況が分かるように、イラストや画像を使うなどの表現活動を行った。

その後、調査内容を基に、自分で調べた(図4)町の生活環境の課題から考えたプランについて、文章や図を使い分かりやすく「まちづくりプラン」(酒々井町への願い)シートにまとめた(図5)。



図4 町役場への調査活動

(5) 「まちづくりプラン」シートの発表(9月)

はじめに選挙管理委員会の職員から、選挙の仕

組について説明を受けた後に、学級ごとに各自の「まちづくりプラン」を発表し合った(図6)



図5 児童作成「まちづくりプラン」シート



図6 「まちづくりプラン」シートの発表

(6) こども模擬選挙(9月)

学級ごとに発表した「まちづくりプラン」を基に、選挙管理委員会から借用した記載台と投票箱と実物と同じ素材の模擬投票用紙を使用して、模擬議会の代表者1名を選出した(図7)。本格的な選挙を模

擬的に体験することで、緊張感の中にも、政治に主体的に関わる町民としての資質でもある主権者意識を育むことができた。



図7 子ども模擬選挙

(7) 子ども模擬議会(10月)

総務課及び議会事務局と連携して、各小・中学校の児童生徒15名が一般質問を行う模擬議会を開催している。小学校からは、模擬選挙で選ばれた5名の児童が、

- ①町の交流スペースとしてのカフェの設置
- ②商業施設を誘致する活動
- ③公共施設利用率向上のためのイベントの周知
- ④町の横断歩道への音響信号の設置
- ⑤町のベンチおよびベンチマップの作成

について質問と提案をした(図8)。

①②③は、施設を活用した町の活性化について、④⑤は、『第6次酒々井町総合計画』の中の、「便利で快適な歩いて暮らせるまちづくり」の基本目標および「住み続けられるまちづくりを」というSDGsの視点に基づいた提案となっていて、多面的・多角的な視点でまちづくりについて考えた内容であった。



図8 子ども模擬議会(コロナ禍前)

5 まとめ

児童は、新聞記事を通して、他市町村のまちづくりに関わる行政的な取組について知ることで、自分たちの暮らしの中での町のよさや改善点に気づくようになった。そして、町の現状を見直してよりよい町にするための方策を主体的に考えるようになった。また、それを自分だけのプランに止めずに、町行政に反映させることの可能性を感じ取り、主権者意識を育むことにつながった。以上のことから、この学習は、主題である「ふるさと学習を通じた主権者教育の推進」に基づいた実践となったと考える。

本実践は、代表児童が提案したプランに対して、学年全体で、より具体的なプランに練り上げるなど、昨年度の課題であった模擬議会後の児童たちによる協議の場を設定することができた。今後は、他市町村のまちづくりプランに関する新聞記事をより深くリサーチして、自分のプランの根拠資料としたり、町行政への要望や提案だけではなく、自分のプランに関する内容で、自分にできることを主体的に実践したりすることができるように、推進体制を整えたい。

子どもが新聞に親しむための工夫

～環境整備と新聞を活用した授業を通して～

長柄町立長柄小学校 織田 純子

1 はじめに

本校は令和3年度からの2年間、NIE推進実践校の指定を受け、2年目の取り組みとなる。

新聞を普段あまり読んでいない児童が多かったことから、まずは児童がもっと新聞を身近な物として感じられるような環境作りに取り組んだ。1年目は今までに比べ新聞を読む機会が多くなり、新聞を身近に感じるようになった。そこで今年度は、様々な教科と組み合わせて教科横断的な学習の中で、新聞を効果的に活用できる授業実践を目指した。新聞記事を読むだけにとどまらず、自分の考えや意見を伝えたり発信したりする力を身に付けられるようにしていきたい。

2 実践内容

【新聞に親しむための環境づくり】

(1)新聞コーナーの設置

昨年度に続き、児童の目につきやすい昇降口と図書室に、新聞コーナーを設置し、各社の新聞を手にとることができる場を設定した。また、話題性のあるニュースについては、掲示板に貼り出し、社会のできごとに興味をもてるようにした。

図書室には新聞の構成について分かりやすくまとめた掲示物を用意し、「見出し」や「リード文」などの用語についても紹介をした。低学年でも壁新聞にまとめる活動ができるよう、学校図書館司書の先生と協力して、分かりやすい掲示物を作成するよう心がけた。



(2)高学年コーナーの設置

高学年フロアや教室には、高学年用の新聞コーナーを設置し、数種類の新聞を手にとることができるようにした。授業時間の合間にも新聞を手にとり、興味をもてるような環境作りに努めた。



【新聞を活用した授業実践】

<5年生の実践>

「新聞を読もう～新聞でSDGsを読もう～」

国語科「新聞を読もう」の学習の発展として、SDGsに関連した記事を読み、自分たちの考えを伝え合う学習を行った。

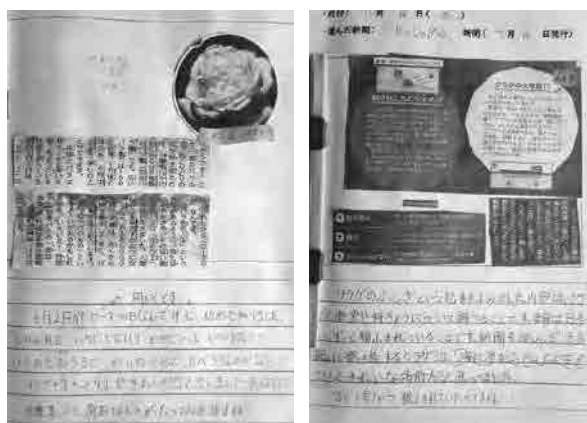
まず10種類ほどのSDGsに関連した記事を読み、グループで項目、気になった記事を選択する。選んだ記事を読み、「5W1H」に青線、「筆者の伝えたいこと」に赤線を引いて自分の感想を書く。さらにその記事がSDGsの17のどの目標に関する記事なのかを考える。ただ記事を読むだけでなく、最後にはその記事に関して、自分たちにできることは何かを話し合い、自分の考えを伝え合う学習を行った。

この学習を通して、新聞記事の細かい内容にまで目を向ける姿が見られた。また、記事から分かったことや、それに対する自分の考えを伝え合う場面を意図的に設定したので、互いの考えを深め合うよい機会になった。



「NIEタイム」

5年生は、定期的に「NIEタイム」を設定し、気になる記事の感想を書いたり、紹介したりする活動を行った。興味関心のある記事を選び、それを切り取り、ファイルにスクラップしていく。ただ記事を集めるだけではなく、要約や感想・意見などを書いていく。継続することで、書く量や内容が伸びるだけではなく、読解力や要約力、学びに向かう意欲も向上すると感じた。あまり難しく考えずに、写真や見出しからお気に入りの記事を見つけることからスタートすれば、様々な学年で取り組める活動である。



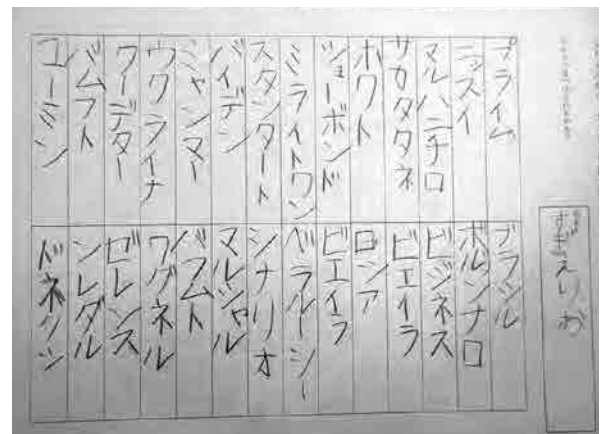
<2年生の実践>

「町たんけんに行こう」

生活科の「町たんけんに行こう」の学習で、町探検に行き、発見したことや分かったことなどを1年生に伝える活動を行った。「消防署」「交番」「コンビニ」「自動車整備工場」の4か所にグループごとに探検に出掛け、それぞれの場所でのインタビュー内容や発見を新聞記事にまとめてみた。人を引き付けるような見出しを考えたり、写真やイラストを入れて分かりやすくしたりするなど、2年生らしい工夫が見られた。発表の際は、クイズを取り入れ、子どもたちが主体的に学び合える学習になった。2年生なりに、新聞を身近に感じる事ができた。



様々で、自分の興味のある言葉を見つけることに意欲的であった。低学年にとって、新聞の内容を理解するのは難しいが、新聞を身近に感じるよい機会になった。



<1年生の実践>

「新聞からカタカナを見つけよう」

これまでに、カタカナの正しい書き方や似ているカタカナに気を付けて書くなど、基本的な学習は終え、多くの児童がカタカナが書けるようになってきた。そこで、カタカナ学習の発展として、新聞の中からカタカナの言葉を見つけて、ワークシートに書きだすという活動を行った。

普段、大人の新聞を目にする機会はほとんどない1年生だが、記事の中からたくさんカタカナを見つけることができ、身近な生活の中に多くのカタカナが存在することに気が付くことができた。「ウクライナ」などの国名や、「コロナウィルス」「ワクチン」などの時事ワード、スポーツ選手やチーム名など種類は

3 成果と課題

<成果>

- ・子どもたちが新聞を手にとりやすい場所に「新聞コーナー」を設置したり、新聞を活用した授業実践を行ったりすることで、新聞記事に興味をもつ児童が増えた。
- ・数社の新聞を読み比べる活動を通して、伝えたい内容の違いや構成の違いなど、情報を発信する側を意識して読む姿が見られた。
- ・自分の興味をもった記事を紹介する活動を通して、情報を取捨選択する力や、自分の考えを伝える力を身に付けることができた。
- ・SDGsなど、世間で注目されている内容について

て新聞記事から多くのことを学ぶことができた。
記事に対する自分の考えをもち、伝え合う活動も
有効だった。

<課題>

- ・ 授業の中にどのような方法で新聞を効果的に取り入れていくか、もっと教材研究が必要だと感じた。各教科の時数は限られており、取り入れていくことに難しさがある。
- ・ 新聞に興味をもち、身近に感じることはできたが、やはり漢字や語彙が難しく、内容を理解するのに時間がかかってしまう。新聞を難しいものにとらえずに、たくさんの情報がつまった面白い情報収集ツールと感じてもらうには、どのような手立てがあるのか考えていきたい。

4 まとめ

今回、NIE推進実践校の指定を受けたことにより、新聞を身近に感じる児童が増えたことが一番の成果だったと思う。今後いっそうICTの活用や情報化社会が進むことが予想されるが、活字を読むことの楽しさや素晴らしさも忘れてはならない重要なことだと改めて感じた。

新聞をスクラップする活動など、楽しめる活動から入り、新聞への抵抗感をなくしていきたい。そして、新聞から得られる情報量の多さや素晴らしさに少しでも気付ける環境を今後も整えていきたい。

初めてのNIE～新聞に親しむ～

市川市立鬼高小学校 吉田 美紗希

1 はじめに

2年生が初めてNIEに取り組んだ。無理のない範囲で、新聞に親しめるように実践してきた。

2 実践状況

○新聞作りの活動

①国語科

「えいっ」、「すみれとあり」、「きつねのおきやくさま」、「わにのおじいさんのたからもの」、「さけが大きくなるまで」、「ないた赤おに」の学習の最後に、まとめとして、A5新聞をかいた。学習をして分かったことやそのお話でいちばん印象に残ったところなどを絵を入れてかいた。字数が多くないこと、絵も入れられることで、子ども達も楽しく取り組むことができた。また、お家の人に見せるという相手意識をもたせることで、丁寧にかこうとする子どもが多かった。

②生活科

町探検の学習で、調べてきたお店や施設のことをA5新聞にかいて、友達に紹介した。出来上がった新聞は地図上に貼り、掲示した。

○新聞活用の活動

①新聞を見る

教室に、新聞の1面を掲示し、朝の会でトップ記事を紹介した。今まで新聞に触れてこなかった子ども達も新聞を見たり、写真を見たり始めた。特に、スポーツがトップ記事の時には、写真だけでなく、記事を読む子どももいた。

②お気に入りの写真

新聞の中からお気に入りの写真1枚を選んで、画用紙に貼り、選んだ理由と写真に題名をつけ

て、発表した。新聞にはいろいろな写真があることに気付くことができた。A5新聞で見出しをかいてきたこともあり、題名を工夫することができていた。

③漢字見つけ

新聞1面の中から、2年生で習った漢字を見つけるゲームをした。習った漢字がたくさん使われていることに気付くことができた。

3 成果と課題

○子ども達が新聞に親しむことができた。国語科では、まとめにかくことが定着し、新聞をかくことを楽しみにしている子どもが出てきた。

○文章を書く力がついた。新聞だけでなく、ノートでも、自分の考えを書く時に、手が止まる子どもがいなくなった。

○社会で起きている出来事に興味をもつことができた。「新聞に載っていること、朝テレビでやった。」などと言う子どももいた。

●年間計画の中で、どこで新聞を取り入れるかを考え、無理なく取り組めるようにする。

●学年や委員会など、他の先生方とも協力して取り組むことも必要である。

4 まとめ

2年生が無理のない範囲で取り組めるよう、NIEを実践してきた。新聞に触れ、新聞とはどのようなものかが少し分かったと思う。

今後は、新聞活用の面で、もう少し考えて実践していきたい。

新聞に親しもう

～「新聞を活用した授業づくり入門」をめざして～

香取市立佐原小学校 石井 英理子

1 はじめに

佐原小学校は、令和4年度からNIE実践校としての指定を受け、本年度が1年目の取組となる。

本校5年生では、「情報を関連付けて思考を深める子どもの育成」を目指し、日々の授業に取り組んでいる。本年度は5年生の「新聞を読もう」、物語「大造じいさんとがん」「雪渡り」、説明文「白神山地からの提言」、エッセー「みずぎさがしのたび」を中心に実践をした。

2 実践及び結果

(1) 朝のチャレンジタイム

まず、火曜日の朝のチャレンジタイムの取組である。毎朝10分の活動は、月曜日と木曜日は読書、火曜日が読解力問題、水曜日は計算テスト、金曜日は漢字テストである。これを1年から6年まで全校で継続して進めている。

火曜日の読解問題では、中学年以上が「天声子ども語」を一読し、学年に応じた決められた文字数で、「読んでわかったことや不思議に思ったこと、新たな考えや意見」などを書いている。



旬のコラムに書かれた情報と既有的の知識や経験に関連付けて考えを形成するのである。これを継続していることにより、初読のテキストをある一定スピー

ドで読み取る力が付いている。

アウトプットを位置付けたインプットにより、より確かな読解の力が付いている。

(2) 授業での取組

ア 「新聞を読もう」

授業の導入時に、これまでに新聞を手にして読んだことがあるかを調べたところ、「新聞を取っていない」家庭が全体の半数近くあった。また、新聞を購読していても、読んだのは漫画か番組欄のみという児童がほとんどであった。

そこで、一人一紙を準備し、どのような構成になっているのかを十分に観察させた。興味深そうに読んでいたが、次第に近くの友達との比較が始まり、大見出しや小見出し、リードや本文などの作りが一致していることに気付けた。

また、同じ内容の記事であっても、その切り取り方や編集により、視点の当てられ方には違いがあることを知った。

最後に、見出しをあえて隠した二紙を読み比べ、グループで大見出しを考える活動を行った。キャッチーな見出しを考えたグループに「見出し大賞」を与えた。この学習を通して、新聞を読む「視点」を手に入れることができた。



イ 「3つの視点で日記を書こう」

～物語「大造じいさんとがん」～

物語の単元であるが、ここで「新聞記者の目」で、情景を読み解く活動を行った。

視点は、①大造じいさん②雁の残雪③新聞記者である。これまでに、児童はダイナミックに山場を捉えて内容をつかむ学習を積み重ねてきた。ここで、「3つの視点」をもたせることにより、「3つの作戦」をより一層読み深めた。

これまでに、新聞記者は、事実を客観的に取材して表現していることをつかんでいた。そこで、より正確に読み取り、客観的に表現しようとする姿がそこにあった。



3つの作戦は、①うなぎ釣り針作戦②たにしばらまき作戦③おとり作戦である。椋鳩十の描き方は、第三者の視点で一貫しているが、そこに新たな視点が加わることで、より立体的に(短時間で)読解する事ができた。目的的に読むエネルギーを感じた。



ウ 「意見をこうかんしよう」

～説明文「白神山地からの提言」～

本文の中に様々なグラフや資料が散りばめられており、それらを関連付けて、内容をつかみ、最後に自分なりの提言文を書くものである。そこで、さらに新聞に書かれた関連資料を読む時間を設定し、より説得力のある提言文を書けるようにしたのである。



社会科でも朝のチャレンジタイムのコラムでも、関心が深まってきた内容であり、意欲的に学習に取り組めた。

エ 宮沢賢治の世界を探究しよう

～物語「雪渡り」～

自ら問いを作って探究する「問い」ストーリーを展開した。



教科書の巻末に「金子みすゞさがしの旅」が配置されており、作者の人生観や作品論などにも迫れる良い単元として扱った。

初読では、簡単な「問い」を一人一人が3つ作った。その内容にはもちろん個人差が生じた。

2時間目には、3人グループを作り、そこで3つの問いに絞らせた。このグループワークでは、かなりの盛り上がりを見せた。一読で答えが導き出せるような問いは、この時点で淘汰されていく。そして、第3時間目には、学級で以下の3つに絞った。

ア「四郎が紺三郎さんを信じて団子を食べたのはなぜだろう」

イ「11歳以下しか幻灯会に呼ばれないのはなぜだろう」

ウ「宮沢賢治にとって青とは、何を意味するのだろうか」

3つの問いを毎時間3人グループで読み解き、最後に全体で共有した。

中盤で、新聞記事に書かれた賢治に関する記事を重ね読みしたところ、次のような書評を終末に書くことができた。(以下は、その中から抜粋したもの)

- ・ 話の深さが分かったり、友達の意見を聞いて「なるほど」と思ったりで楽しかった。
- ・ Aさんの「幻想の中にいるときに必ず青が出てくる」という意見がユニークだと思った。
- ・ 賢治にとっての青い色は、ファンタジーへの誘いで、雪が積もって固まって、普段行けないところへ行くのが雪渡り。この題名にも意味があって、たくさん読んだからこそ分かった。
- ・ キツネは、「うそつかない。ぬすまない。そねまない」は、賢治の理想の世界かもしれない。
- ・ ファンタジーの入り口と出口を「雪渡り」が表している。この世界で四郎とかん子は、一つ成長したのではないか。

5年生でありながら、かなり深い読み取りができている。6時間扱いであったが、新聞や動画を適

宜教科書と関連させて国語科指導を行うことで大きな成果が見られた。

オ みすゞさがしのたびを新聞にまとめよう

～エッセー「金子みすゞさがしのたび」～

ちょうど読売新聞で日曜版に紹介があり、児童に紹介すると、「自学でも調べてきます。」と各自がインターネットや書籍で金子みすゞについて調べてきた。これまでに本一冊をテキストに取り組んできた経緯もあり、わりあい容易に教科書のテキストを読んだ。合わせて、新聞で得た情報を重ね読むことで、より豊かな読解ができた。新聞を読んで活用すること、また、読解で得た情報を新聞にまとめることで、立体的な理解ができた。

3 成果と課題

○句の内容を散りばめた新聞を手に取り、読むことで、目的的に読解の力を伸ばすことに有用だった。

○活字離れが叫ばれて久しいが、新聞を毎週目にし、コラムを読んで意見を書いたり、授業で活用したりすることで、長文に対する苦手意識が減ってきた。

○新聞には、テキストだけでなく、図や写真、リードや見出しなど、多くの情報があり、それを取捨選択しながら活用する力が伸びた。

●今回、後期は経済新聞を読むこととなったが、小学生にとって経済専門用語や難読漢字が弊害となり、漢字を調べるのに費やす時間が、かなり多く生じた。次年度は、小学生新聞を主体とした選定を進めたい。

4 おわりに

実際に毎日届く新聞を手にする、記者や編集者の熱い思いに触れられた。次年度には、もっと多くの視点から、さらに多くの学年での取組を進めたい。

新たな取組～図書館から記事を発信！～

船橋市立芝山東小学校 高橋 若奈・岡田 絵理（司書）

1 はじめに

本校は、令和4年度よりNIE教育推進の指定校として今年度が実践一年目となる。

本校でも新聞を活用した授業実践については、教科や単元の学習の中で取り入れている。一方で、継続的な活用例を増やしていきたいと考え、全校の児童が日々の学習に取り入れたり、目に触れたりする環境づくりをどのようにしたらよいかということについて考えてみた。そこで、一年目は、「新聞に触れる、親しむ」を意識して、図書館と新聞をつなげて活動した例を報告する。

2 実践状況

児童が新聞を継続的に活用し、日常的に触れ、親しんでいくにあたって、本校図書委員会の活動の取組では、新聞記事を紹介する活動を行っている。全校の児童に向けて新聞を読むきっかけづくりや時事に関心をもってもらう活動をしていくことを目標とし、「図書館から発信する新聞記事」をテーマに記事と自分の考えを紹介する活動を続けている。これは、指定を受ける前に、コロナ禍により本来の活動が少なくなってしまったことで、毎日、図書館に届く新聞を利用し、自分たちの活動を増やしていこうという複数の取組のうちの一つとして始まった。活動の内容は、司書が児童の関心を引くような記事を切り抜きためていく。その中から児童が自主的に記事を選び、記事の内容に対する自分の考えや感想を書き、図書館の貸出カウンターの脇や図書館前廊下にコーナーを設けて掲示していくという流れである。この活動が定着し、今年度は「新聞を読もうコンクール」に委員会の児童全員で出品した。

3 結果

当初のねらいの一つである「継続的な活用と児童が新聞に触れる、親しむ」という環境づくりについては、十分な活動例と実践効果を得ることができた。継続して行うことで、児童には、記事の内容に対する関心の広がりが見られた。児童からは、「自分で記事を選ぶことによって、いろいろな記事に目を向けるようになった」との感想が出された。また、友達の考えを見ると「ああ、そうだな」、「こういう考え方があるのか」ということも感じるようになったとの声があった。

また、新聞記事の紹介をする度に、図書館を利用する児童が、何気なく新聞記事を読んでいく姿も多く見られるようになった。自分の考えを表現することについても着実に成果が見られた。見出しやコメントには、回を重ねるごとに文章の工夫が見られたり、言葉選びがより意識されるようになったりと、新聞を読むことによって洗練されつつあるように思う。見出しの付け方にも、オリジナリティあふれ、人をひきつけるような魅力のあるタイトルが書けるようになった。記事のコメントには、日常生活や自分の経験と照らし合わせて考えるようなところも



見受けられ、より自分事として出来事への関心を高めるよい機会ともなった。図書館とのつながりとして、児童が発信した記事(例えばSDGs、環境問題、新刊、作家のインタビューなど)と関係する図書を借りる児童も増えた。このように、一つ一つのつながりもできてきたように思われる。

4 考察とまとめ

4年生以上では、新聞を取り入れた授業実践は取り組みやすいが、低学年では、まだ見い出せずにいる。どのように全学年が活用の幅を広げて取り組んでいくかを次年度への課題としていきたい。また、今年度同様に新聞と図書館とのつながりを意識した活動の更新や新たな実践も考えていくこととする。今後も多くの児童が新聞に触れ、読みや考えを深めたりする機会が増えるような、発展的な実践例を二年目は展開していきたい。



新聞に親しみ、社会の事象に関心をもつ児童の育成 ～新聞活用の充実を通して～

白井市立白井第一小学校 坂野 仁

1 はじめに

「〇〇選手、金メダル獲ったね。」「こういう事件があったね。気をつけないと。」朝の会や休み時間などに、ニュースの題材について子どもたちに話すことがある。すると、「知らない。」「えっ、そうなの?」このような反応が返ってくるのが少なくない。社会で起きている事象にあまり関心がないのだ。小学生であれば当たり前のことかもしれない。しかし、社会で起きている様々な事象には、子どもたちに学びを与えてくれるものが数多くある。それらを知ることは、子どもたちにとって確かなプラスとなるはずだ。本校では、社会と子どもたちをつなぐ窓口として新聞を活用することで、社会の事象に関心をもち、そこから学びを得ることができる児童の育成を目指すこととした。

2 実践と成果と課題

実践1 新聞記事を用いたスピーチ(5・6年生)

届いた新聞に目を通し、子どもたちへ知ってほしい内容や考えてほしい内容がある記事を児童に配付する。児童はそれらに目を通し、もっとも関心をもったものについて、「見出し」「記事の概要」「感じたこと・考えたこと」をスピーチ原稿にまとめる。それを朝の会や帰りの会で読む活動を実践した。



成果

新聞記事を目にする機会を増やすことができたことが、何よりの成果である。内容が難しいときは家族に力を貸してもらった児童もおり、家庭内で社会の出来事を話す場面も増えた。記事を読んで考えたり感じたりしたことについて、それぞれの考え方や感じ方があることに、聞いている方も気付くことができ、他者理解の一助ともなった。

課題

内容を読み取れず、家庭の力も借りられない児童の中には、リード文だけを読み、スピーチしている様子があった。学力や家庭環境の差に左右されない取組の在り方を検討する必要がある。

実践2 新聞には何が書いてある?(1・2年生)

学級担任が新聞に目を通して記事を選択し、児童へと紹介する。児童はそこで社会の出来事について知り、感想を交流し合う活動を行った。また、紹介した記事が載っている新聞は教室に置いておき、児童がいつでも見られるようにした。

成果

新聞の内容を紹介することで、新聞記事に対する関心が高まり、教室に置いてある新聞を手にする児童が増えた。新聞の内容を知ることで、知らなかったことを知る機会になった。特に、普段の生活でニュースを見ない児童ほどその傾向が強かった。

課題

新聞の内容を見ただけで理解をすることには限界がある。担任がかなり簡単にし、説明してやっと理解ができるようになる。新聞に対する関心が高まり、手に取る児童が増えたことはよいことだが、内容理解の壁をどのように越えるかは検討が必要である。

実践3 その時、何を考えた?(3・4年生)

学級担任が新聞に目を通し、人物の写真資料がある記事を選択する。その記事から本文を除いた写真資料のみのプリントを作成し、映っている人物の心情について考え、吹き出しに自分の言葉で表現する。そのあと、どのようなことを書いたかを交流し、記事の内容について話をする活動を行った。



成果

社会科の学習に関わりのある記事を選ぶことで関心を高め、学習内容の理解につなげることができた。また、まずは写真に写っている人物の心情を想像することで、記事の内容への関心を高めることができた。活動を終えた後も、その記事を詳しく見たがる児童もあり、社会の出来事を知る楽しさを味わうことができた。

課題

この活動を継続するにあたり、さらにどのような手立てを講じていけばよいかは検討の余地がある。現状のままでは児童が飽きてしまうことも考えられるため、新しい手立てを講じてよりよい活動へとつな

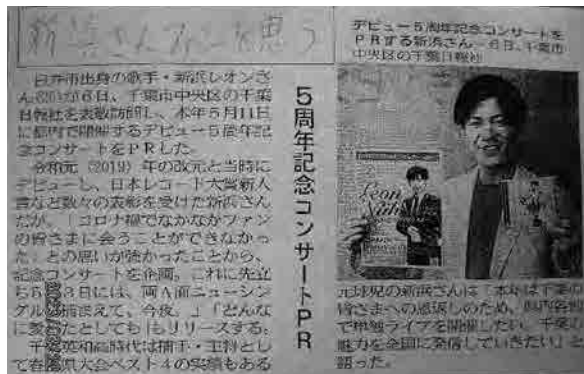
げていきたい。

実践4 見出しを考えよう!(5・6年生)

学級担任が新聞に目を通して記事を選択し、見出しを隠した状態のプリントを作成する。児童は新聞記事の内容を読み、どのような見出しが適切かを考えて表現する。その後、書いた見出しを交流し、実際の見出しと合わせて記事の内容を確認する活動を行った。

成果

活動を始めたばかりのころは見出しが書けない児童がいたが、だんだんと書けるようになっていった。記事の中で、特に印象深かったことを各自が見出しとして表現することが多く、同じ記事を読んでもそこから感じることはそれぞれ違うことが分かり、スピーチ同様他者理解へとつながった。同時に、記事を読んで内容を理解する力も高まった。



課題

正解の見出しは何かを考えるあまり、表現に至らない児童が見られた。「自分がこの記事を書いた記者ならば、どのような見出しにするか考えてみよう。」と声かけをするようにした。児童が自分で読み取る活動になるため、あまり複雑な内容の記事は扱えず、記事選択の幅は狭かった。高学年ともなればより社会の実情に踏み込んだ記事も扱っていききたいと考える。

3 考察

新聞記事を扱って様々な活動をすることは、社会の出来事に関心をもつ児童の育成につながるということがわかった。また、新聞記事の内容を読んだり知ったりすることは、児童の思考の幅を広げることにも効果が認められる。

一方、新聞は本来大人を読者層としてつくられているため、児童だけで内容を理解することには限界が見られる。今はまだこちらからの働きかけが新聞に触れるきっかけとなっているが、やがては自ら手に取る児童にしていくためには、さらなる実践が必要である。

4 まとめ

2年のNIE実践初年は、児童が新聞に親しみ、社会で起こる出来事に関心をもつきっかけをつくるために、新聞記事を用いた様々な活動を実践した。それらの活動を通して、それぞれの成果で挙げたとおり、社会の事象について知り、そこから考えたり感じたりしたことを経て学びを得る、目指す児童の姿にほんの少しだが近づくことができた。

2年目となる次年度は、今年度の課題をどのように改善していくかを考えつつ、新しい取組にも着手し、さらに新聞と子どもをつなぐ活動の充実を図っていきたい。

新聞を活用した、メディアリテラシーの育成をめざして ～新聞に慣れ親しむ活動を通して～

鳴川市立天津小湊小学校 粕谷 賢二

1 はじめに

本校は、令和4年度からの2年間、NIE推進実践校の指定を受け、初年度の取り組みとなる。

本校の児童の実態は、「自分の考えをノートに表すこと」「自分の考えを的確に相手に伝えること」を苦手としている。研究目標を『仲間とともによりよく問題を解決する力の育成 ～「話す」・「書く」活動を通して～』とし、表現する力を身に付けさせる授業実践を行っている。その手立ての一つとして、NIEの実践をしていくことにした。

最終的には、新聞を活用したメディアリテラシーの育成を目指していく。しかし、子どもたちは、新聞をじっくりと読むという経験すら少ない。そこで初年度は、「新聞に慣れ親しむ」ことを目標とし、新聞に慣れ親しむ活動を通して、徐々に表現力が身に付くような取り組みをした。

2 実践状況

(1) 1年生の実践

〔学活〕楽しく新聞とふれ合おう

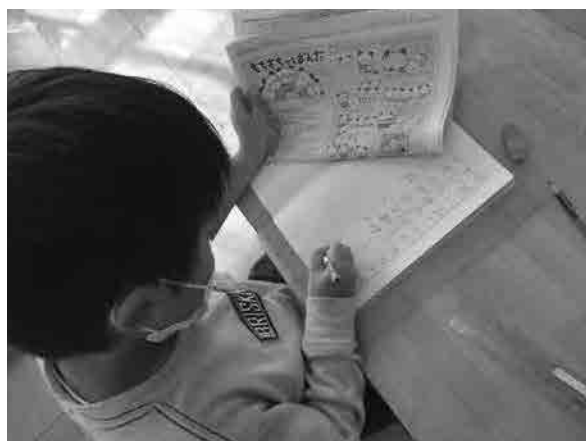
ゲーム感覚で楽しく新聞に触れることができるよう、「新聞の中で一番大きな文字を探す」活動を行った。新聞を読むことがほとんどない1年生にとって、興味をもって取り組むことができた。どの児童も新聞の中から大きな文字を見つけることができた。大きな文字は新聞のどこにあったのか、どのような見出しがついているのかなどを確認することで、新聞の構成にも目を向けることができた。この活動を生かし、『どうぶつしんぶん』という絵本を見て、題字や見出しなどがどのように書かれているのかを確認した。



(2) 2年生の実践

〔国語〕カタカナで表す言葉をさがそう

子ども新聞から国名や人名、外国からきたもの、動物の泣き声などのカタカナを探し、ノートに書き出す活動を行った。その後、知らない言葉に○をつけ、それを一人1つずつ発表した。自分が見つけた言葉だけでなく、友達が見つけた言葉を見ることで、さらに多くの言葉にふれ、カタカナで書く言葉への理解を深めることができた。子ども新聞を使うことで、記事や写真に興味を持ったり、夢中になって見つけたりする姿が見られた。授業後、「知らないカタカナの言葉が何を表しているのか調べてみたい。」という感想をもった児童も見られた。





(3) 3年生の実践

〔総合〕新聞の内容を読み取ろう

新聞記事を読むことで、新聞にはいろいろな情報が載っていることを知った。また、知っている言葉を見つけるなど、新聞に慣れ親しむことができた。また、新聞の構成にも目を向け、今後の新聞づくりに役立てるようにした。

(4) 4年生の実践

〔社会〕新聞づくり

新聞記事を読み、どのような内容が書かれているか、新聞のつくりはどうなっているのかなどを確認した。その後、個々に伝えたい内容を決め、新聞記事を参考にしながら、新聞を作った。さらに、作った新聞を発表し、お互いに感想を述べる場を設定した。

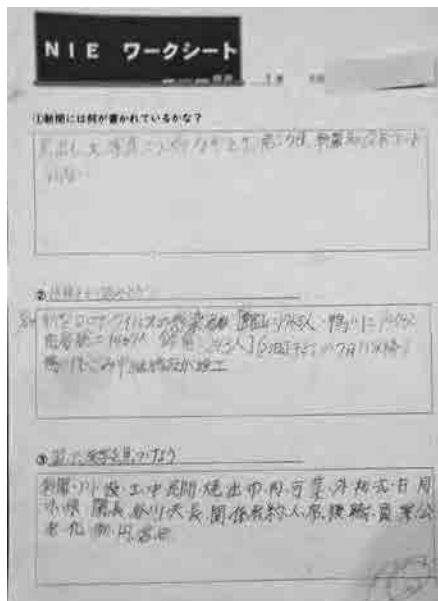


(5) 5・6年生の実践

〔国語〕新聞記事を要約しよう

新聞記事を読み、何が書かれているのかなどの新聞の構成を確認したり、どのような内容が書かれているかを簡潔にまとめたりする活動を行った。合わせて、習った漢字を見つける活動を通して、漢字の定着や語彙力の向上を目指した。新聞記事の内容を読み取ることに慣れてきたら、新聞記事を要約する活動に繋げていった。





(6) 全校での実践

見出しを隠した新聞記事を読み、自分なりの見出しをつける活動を行った。見出しとは、「一目見てその内容が分かるようにしたもの」と確認をすることで、新聞記事の内容をじっくりと読み、内容にあった、自分なりの見出しをつけることができた。また、できた見出しを発表することで、お互いの考えを共有することができた。どの児童も、学年に応じた見出しをつけることができ、高学年になるほど、的確な見出しをつけることができていた。



(7) 新聞に親しむための環境づくり

1階廊下にNIEコーナーを設置し、児童が各社の新聞を手軽に手に取るができるようにした。また、授業で実践したことを掲示し、誰もが見るようにした。



3 結果

低学年は、「大きな文字を探す」や「カタカタの言葉を探す」など、文字や言葉探しの活動を通して、新聞に興味をもつことができた。

中学年は、新聞記事の構成を知ることができ、新聞づくりに生かすことができた。自分が何を伝えたいのかをしっかりと決め、それをどのようにすれば読み手に伝わるのかを考えながら新聞作成をすることができた。

高学年の、新聞記事を要約する活動では、はじめは「新聞記事を読み取る活動」を行い、その後、「新聞記事を要約する活動」へと繋げていった。要約することを苦手としている児童も、新聞記事を読み取るなど段階を踏むことによって、内容の要約をすることができるようになってきた。

全校で取り組んだ、新聞記事の見出しをつける活

動では、見出しをつけるために、新聞記事をじっくりと読むことができた。見出しも、最初は長い文章のようなものになってしまう児童もいたが、何回か実践しているうちに、短く的確な言葉を選べるようになってきた。

各学年とも、自分で調べたことや考えたこと、作成したことを、班や全体で発表する場を意図的に設けることで、自分の思いを相手に分かりやすく伝えようとする姿が見られてきた。

新聞に親しむ環境づくりでは、NIEコーナーを設置したことで、休み時間に進んで新聞を読みに来る児童が増えた。

4 考察

児童にとって、少し難しいと感じられる新聞も、学年の実態や発達段階に応じた、さまざまな工夫をすることで、興味をもつことができ、意欲的に活動することができた。

どの学年の活動も、新聞に慣れ親しむ活動を通して、「新聞は、どのような構成になっているのか」「新聞にはどのような内容が載っているか」「新聞記事を相手に分かりやすく伝えるために、どのような工夫がされているか」「新聞にはどのような言葉が載っているのか」など、新聞の概要について、学ぶことができた。

また、各学年の取り組みを通して、「表現力」も少しずつ身につけてきた。

5 まとめ

初年度は、新聞に慣れ親しむ活動を通して、表現力が少しずつ身につけてきた。次年度は、今年度の活動をもとに、「情報の活用」「比較読み」「情報の発信」など、新聞を活用したメディアリテラシーのさらなる育成を目指していきたい。

朝のNIEタイムを通して新聞を身近なものに

横芝光町立日吉小学校 石井 浩人

1 はじめに

本校は令和4年度からの2年間、NIE推進実践校の指定を受けており、本年度が初年度の取り組みとなる。本校では令和元年より3年間、国語科の研究を行ってきており、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を目標に、日々取り組んできた。研究に入る前は、本校の児童は思考力や判断力、表現力等に課題があり、自分の考えをもったり文章に表現したりすることに苦手意識をもつ児童が多くいた。しかし、研究において言語活動を取り入れた授業づくりを進めて行く中で、書く活動を積み重ねてきたことにより抵抗なく自分の考えを表せるようになってきた。

この成果を基にして、「新聞」というあらゆる分野の情報を網羅した、信頼性の高いメディアを読み解き、自分ごととして考えを深めることで、社会への関心を高めたりられる児童を育成するため、まず初年度は、児童が新聞を身近に感じられるような環境の整備と、週1回の新聞を活用した活動の時間(NIEタイム)を設定し、新聞に触れる機会を推進していきたいと考える。

2 実践状況

【日課へのNIEタイムの導入】

本校は朝、登校してからの20分間を読書タイム・学習タイムと位置付けている。本年度より木曜日の朝を「NIEタイム」と位置付け、その時間に新聞を活用した取り組みを実践して行くこととした。

【NIE推進に向けた話し合いの実施】

本年度、2学期から新聞購読を始めるにあたり、

夏休み中にNIEタイムの取り組みに際して、その内容をどうするか話し合いをもった。低・中・高での達成目標をどうするか、また、そのためにはどのような取り組みが適切かを話し合った。その中で、普段、新聞に触れる機会のない子供たちが新聞に触れたり、親しんだりする活動を中心に進めるという方向性が見えてきた。また、昨年度から1人1台端末の活用が推進されているので、関連させていくこととした。

【NIEタイムでの各学年の具体的な取り組み】

1年生

○新聞記事を読んだかたかな探しや、クイズ作り、知らなかった事や始めて知ったことに線を引く活動。

2年生

○新聞記事の意味や面白さを正しく理解するために、記事の内容を使ってクイズ作りをしたり、言葉集めをしたりする活動。

3年生

○新聞の内容について、気になった文章やキーワードに線を引き、そこについて発表したり、自分の考えを伝えたりする活動。

4～6年生

○1人1台端末を用いて、担任が選んだ新聞記事をTeamsに投稿し、その記事を読んで、要約したり自分の考えを書いたりする。その上で、Teamsのコメント機能を利用して考えを共有したり、意見を伝え合ったりする活動。

3 結果

1年生

○低学年は記事を読むことが難しいため、読み聞かせをすると文章に興味をもつことができた。また、動物や自然に関する内容の記事を提示すると意欲的に取り組むことができた。

2年生

○記事の内容を1年生よりも難しいものを選んだことで、より文章を読もうとする意欲が湧いているようだった。教師からの質問やクイズを用意したことで、記事を興味深く読む児童が多かった。

3年生

○世の中のニュースや、知らなかった事が書かれている新聞記事を読むことに意欲的に取り組む姿が見られた。新聞記事の面白さに気づき、新聞自体を読みたいと興味をもつ児童もいた。

4～6年生

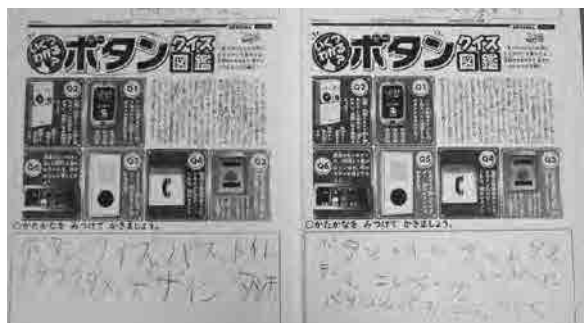
○記事の内容について自分なりの考えを書く活動を積み重ねたことで、書く内容が少しずつ内容に迫るものになってきた。また、友達同士で考えるの共有を図ったことで、内容に対する深まりが出てきた。新聞の情報の多さに読むことが難しいと感じる児童もいたが、社会科や国語科と関連させながら活動することで新聞を活用した学習がより深まることが分かった。

4 考察

NIE実践、初年度ということでは「新聞」に親しむための取り組みを教職員間で共通理解を図りながら進めて行ったことが良かった。児童にとって新聞は身近なものでは無いため、まず低学年は新聞の面白さや有用性を体感させることが必要だと考えた。また、高学年は新聞記事に対する感じ方や捉え方は人それぞれであるため、それを共有化し、友達との考え方の違いに気付かせる活動を取り入れた。

NIEタイムを日課に位置付けたことにより、活動に取り組む時間が確保され、教師も工夫しながら児童に付けたい力を付けることができていた。

また、1人1台端末を活用したことで、児童一人一人が自分の取り組みをポートフォリオとして蓄積していけるので、振り返る際にも有効であった。



【1・2年生】



【3～6年】

5 まとめ

本年度、NIE推進実践校の指定を受けたことにより、なぜ今、「新聞」なのかということについて指導する教師側が考えるよいきっかけとなった。今の子供たちに求められる力は社会に存在する膨大な情報の中から、必要な情報や正しい情報を取捨選択し、活用する力である。現在、そのほとんどがインターネットを通じたものであるが、実際に信頼性のある情報は「新聞」のように複数の目による厳しいチェックを経てきたものであることを子供たちに理解させたい。また、記事を読み解く情報活用能力を付けるために、次年度は国語科の活動と関連付けた授業作りを推進していく。

新聞に親しみ、広げる活動

千葉市立磯辺第三小学校 五十嵐 裕一

1 はじめに

本校は、今年度から2年間、NIE推進実践校としての指定を受け、初年度の取組となる。

本校の実態としては、新聞を取っている家庭は多くなく、普段から新聞を読んでいる児童は少ない。読んでいる児童についても、テレビ番組表やスポーツ面、最近の話題というように、興味のある内容だけ読むことが多いようである。新聞については、「字が多い」「大人が読む物」「内容が難しそう」とマイナスなイメージが多かった。一方で、「KODOMO新聞は絵や写真がたくさんあって読みたくなる」という意見もあった。

そこで、まず初年度は児童が新聞を身近な物として感じ、手に取って読んでみたいと思えるきっかけを与えられるようにしたいと考えた。

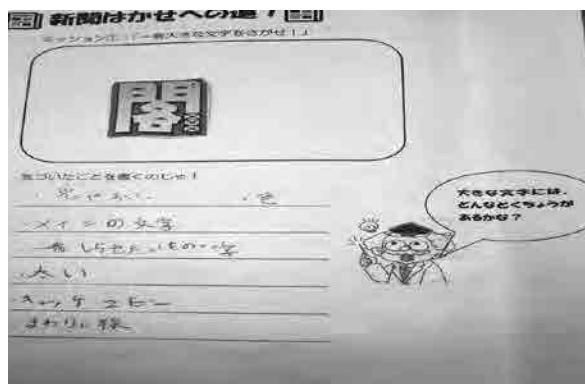
2 実践状況(対象：3年生/集会委員会)

(1) 新聞に親しむ活動

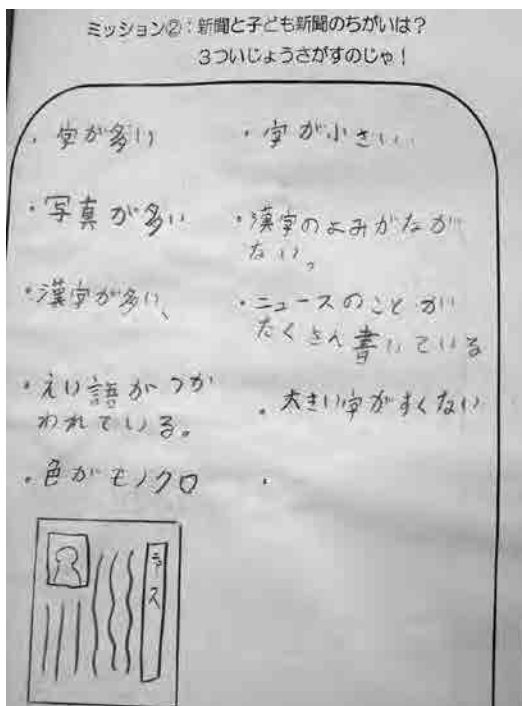
普段新聞に触れる機会の少ない児童が、新聞への興味をもつことができるよう、親しみをもちやすい「読売KODOMO新聞」を使うことにした。

①「一番大きい文字を探せ!」②「新聞(一般紙)とKODOMO新聞の違いを3つ以上探せ!」③「一番興味のある記事を紹介せよ!」という3つの「新聞ミッション」を課した。

①では、字体や太さの違いがあることや、色分け・囲みがあることなどに気付いた。特徴的な部分は、記事の前に短い言葉で書かれているということに気付くこともできた。それが、「見出し」と呼ばれるものであることを確認した。見出しに注目している児童が多かったことが分かった。



②では、読み仮名や色、番組表の有無、文字の数量、記事の内容など、様々な違いに気付いた。



③では、興味によって記事を探して選ぶことができ、友達の選んだ記事も読んでみたいという気持ちをもつことができた。



また、算数で学習した棒グラフや一万をこえる数が、新聞の中にたくさん表れていることに気づき、どんどん探す姿が見られた。

これらの実践を通して、児童が新聞への親しみをもち、少しでも「読んでみたい!」という気持ちが芽生えることにつながった。さらには、「自分たちでも新聞が書けるかな?」「読むだけじゃなくて書いてみたいな。」という書く意欲ももつことができた。

(2) 新聞を書く活動

読むだけではなく、書きたいという思いを受け、実際に新聞を書いて発信する活動を行った。

3年生段階では、まだ新聞の構造について授業で扱っていない。そのため、「見出し」と「トップ記事」の二つに焦点を当てて、書く活動を行った。

見出しは、記事の伝えたいことが一目で分かる物であり、様々な工夫が凝らしてあるということは、前述(1)の通りである。今回は特に見出しに力を入れ、記事の伝えたい内容が一目で分かり、かつ読者に読んでみたいと思わせられるような見出しを考えてから執筆させた。編集会議では、一つの記事に対して二~三つの見出しを考え、友達と協力しながらよりよい見出しを検討・決定していくようにした。「こっちの見出しの方が伝わりやすいね。」「もう少し短い言葉にしたらどうか。」「トップ記事だから、目立たせる工夫をしよう。」などと、記事に対する見出しの重要性を感じながら取り組むことができた。



(3) 委員会による壁新聞

集会委員会が行事や季節に合わせて壁新聞を作る活動を行った。掲示場所は児童がよく使う階段や昇降口付近にしたことで、多くの児童の目に留まることになり、新聞に触れる機会を増やすことにつながった。



3 実践の結果～考察

今年度は3年生での実践を中心に行った。新聞について、国語の学習ではまだ未習であるが、日頃からの取組として教室に新聞コーナーを設け、主にKODOMO新聞を活用したことにより新聞に親しむことができ、更に書きたいという意欲をもって主体的に活動できた。また、未習という段階を踏まえて新聞の構造には深入りせず、「見出し」と「トップ記事」にしぼって書いてきたことで、新聞を書くことへの負担も軽減できたように思う。

課題としては、国語や算数の学習においては活用の見通しがもてたが、他教科においてはあまり活用に至らなかったことである。学年に応じて、様々な教科で活用していくことを今後検討していきたい。

委員会での活動は、新聞について学習している5・6年生が中心となるので、レイアウトや内容にも工夫がなされ、全校に発信するよい機会となった。

4 まとめ

新聞に触れる機会が少なかった児童に、興味をもたせ、広げる活動ができたことは大きな成果である。来年度は実践2年目として、発信する活動と、他教科における活用に重点をおいて取り組んでいきたい。

思考力・判断力・表現力の育成

～新聞を活用した主体的・協働的な学びを通して～

香取市立新島中学校 松井 初美

1 はじめに

本校はNIE実践校2年目である。学校の研修の三本柱の一つとして位置づけた。1年目は先生方もNIE活動が初めてで意識が薄かったが、2年目はNIE研修を年間計画に位置づけることにより、先生方の意識が高まった様子が見られた。また、今年度は日本新聞協会が主催する「いっしょに読もう!新聞コンクール」に全校で取り組むことができたことが大きな成果だった。

2 実践状況

(1) 新聞コーナーの設置

昨年度同様、図書室に新聞を配架し、過去の新聞は資料として活用できるように、新聞社ごとにコンテナを用意し、ストックできるようにした。また、1階の階段下付近にはNIE専用のホワイトボードを設置し、生徒に読んでほしい記事や面白そうな記事を掲示した。生徒が通るところなので、掲示した記事を読んでいる姿がよく見られた。

また、今年度は職員室内のホワイトボードにも先生方に読んでほしい記事や授業で使えるような記事を掲示した。先生方のNIEへの取り組みのきっかけになればと考えた。

(2) 事前アンケート

①家庭での新聞購読状況

- ・購読している…56%
- ・購読していない…44%

②購読家庭での状況

- ・毎日読む…3%
- ・時々読む…38%

・ほとんど読まない…21%

・全く読まない…38%

③新聞を読むことは必要か?

・必要である…67%

・必要でない…33%

※購読していない生徒も回答。

【読む必要がある理由】

- ・読む力を身に付けることができ、勉強に役立つから。
- ・正確な情報を得ることができるから。
- ・テレビやスマホなど他の手段でも情報は得られるが、新聞のように一面に様々な話題が載っていてそれから読み取ることが大切だと思うから。
- ・新聞を読むことによって、知らなかったことをもっと知ることができるから。
- ・インターネットなど誰でも書き込めるものより真実の可能性が高いし、昔からの文化だから読んだ方がよいと思う。
- ・緊急事態の時に役に立つから。
- ・社会の流れについていくため。

【読む必要がない理由】

- ・携帯などで調べればニュースの情報も得られるから。
- ・インターネットやテレビの方が簡単に見られるし、新聞を読むにはお金がかかるから。

(3) 授業での取り組み

①1年国語

「新聞活用の導入で新聞に関するクイズを出題」

- ・同日同紙の13版と14版の一面を提示して違いを

見つけさせ、なぜ違うのかを考えさせる。

- ・同日の数紙の一面を見比べさせ、同じニュースなのに写真や見出しのレイアウトが違うことについて考えさせる。
- ・新聞のインクの原料やカラーについての出題。
- ・今の新聞と昔の新聞の違いについての出題。

家庭で新聞を購読していない生徒もいるので、この時初めて新聞に触れる生徒もいた。クイズ形式で授業を進めたので、生徒たちは興味・関心をもって授業に参加することができた。「もっと知りたい。読んでみたい。」と感想を述べる生徒もいた。

②1年国語

「ファミリーフォーカス」

冬休みの課題として「ファミリーフォーカス」を行った。基本は「いっしょに読もう!新聞コンクール」と同様で、家族と1つの記事を読み合い、意見交流をする活動である。A3のワークシートを用意し、そこに気になる記事をスクラップする。その記事について自分の意見だけではなく、家族で読み合った人の意見も書いてもらい、考え方を広めたり、深めたりすることをねらいとした。提出された課題には様々な記事があり、家族としっかりと読み合っている様子がうかがえた。



③1、2年国語

「コラムの視写」

1、2年の国語の朝学習でコラムの視写を行った。教師が生徒に読んでほしいコラムを選択しワークシートを作成した。

【視写の手順】

- ・コラムを読んで印象に残ったところに線を引く。
- ・語句の確認をする。
- ・視写をする。
- ・見出しをつける。
- ・感想や意見を書く。

1年生は読んだり、書いたりするのに時間がかかっていたが、徐々に活動が速くなってきた。また個人差があるが、感想や意見も深いものになってきた。

④3年国語

「社説の読み比べ」

教科書(教育出版)に「社説を比較する」という題材があるので毎年実践している。教科書の社説を導入として活用し、実際の読み比べは新聞から探した。

2022年4月1日に改正民法が施行され、成人年齢が20歳から18歳に引き下げられた。それに関する社説が各紙掲載された。その中で比較的読みやすく、比べやすい毎日新聞(2022.1.9)と読売新聞(2022.3.31)を使用した。自分事として考えられるテーマの社説を取り上げることにより、学習が実生活へと生かせるようになれば良いと考えた。生徒が興味・関心をもてるような社説を選んだことにより、積極的に調べたり、読んで考えたりする姿が見られた。

⑤3年国語

「コラムの読み比べ」

毎年元旦のコラムを読み比べる授業を行っている。どの新聞も元旦のコラムは一年を見通してのテーマで書かれている。それを読んで気になること

ろや印象に残ったところに線を引き、コラムの見出しを考える。そしてどのコラムが一番元旦にふさわしいかを選び、その根拠も述べさせた。選ぶコラムは人それぞれだが、根拠をきちんと明確にして選んでいる様子うかがえた。

⑥3年社会

「一面の読み比べ」

公民的分野の教科書(教育出版)に「公民にアプローチ～メディアを活用しよう」という公民の学習の導入ページがあり、そこで新聞の一面の読み比べを行った。同じ新聞社の同日の新聞記事でも、地域によって一面の記事が違うことを実感してもらうため、ニュースパーク(日本新聞博物館)の「新聞博物館学習キット」を活用した。同日の全国紙18紙、ブロック紙・地方紙を60紙、英字紙・専門紙・スポーツ紙を22紙送ってもらった。

授業での活用だけではなく、しばらく図書室に展示し、誰もが読めるようにした。新聞の種類の高さを目の当たりにし、驚いている生徒もいた。

⑦2年総合

SDGsの学習で新聞を活用した。まず、出前授業で千葉県立成田国際高等学校教諭の石毛一郎先生と朝日新聞東京本社の遊佐恵美子さんを招いてカードゲームと新聞を使ってSDGsの導入授業を行った。生徒たちはSDGsについて楽しみながら、考えながら授業に参加していた。



その後、新聞記事から気になる記事を収集し、SDGsのスクラップ新聞を作成した。記事を集める際には教師の助言だけではなく、生徒同士がアドバイスを合せて収集している様子が見られた。完成した新聞を読み合うことで、様々な記事に触れ考えを深めることができた。

総合的な学習の時間で学んだことを生かして、2年生の国語の授業でSDGsに関する投書文を書く授業を行った。教科横断型の学びとしても成果を上げることができた。



(4)全校での取り組み

①「いっしょに読もう!新聞コンクール」に応募

今年度は全校で「いっしょに読もう!新聞コンクール」に応募した。7月にコンクールの応募の仕方について説明し、夏休みの課題とした。新聞を購読していない家庭は学校で記事を選び用紙に貼付した。いろいろな新聞を手に取り記事を読んでいる

姿が見られた。3年生の生徒が1名最終審査まで残り、優秀賞を受賞することができた。また、学校も奨励賞をいただいた。

②今年の10大ニュースを考える

12月に日本の10大ニュース、海外の10大ニュースの記事を読みながら考え、新聞社に応募した。

3 成果と課題

○各教科領域の年間計画と照らし合わせて、計画的に新聞を活用した学習を進めることができた。また、新聞活用を通して教科・領域の横断的な学習を推進することができた。例えば、2年生の出前授業では、SDGsだけではなく、キャリア教育や社会科的な学習の要素も含まれている。そして、総合的な学習の時間ではスクラップ新聞を作成したが、同時に国語の授業で自分が調べたテーマの投書文を書く学習を行った。

○新聞からどのような情報を収集するかを学ぶときに読み比べをして考えを深める姿が見られた。

○教科書教材よりも興味・関心をもって取り組む姿が見られた。

▼本校は非常勤講師等の授業も多いので、全ての教科で新聞を活用するのは難しい。

▼実践校を外れた後の取り組みが難しい。

(図書室に配備する新聞がないため。)

4 授考察及びまとめ

実践校2年目で1年目よりは先生方のNIEへの認知度や取り組む意識が高まったように思える。年度当初にNIE研修を年間計画に組み込んでもらい、先生方が実践しやすいよう資料を作成し、誰でも新聞が活用できるような環境を整えることを心がけた。先生方が活用できるように職員室に新聞コーナーをつくったことも成果の一つとしてあげられる。

今後は生徒が授業だけではなく、日常生活の中でも新聞を読む習慣をつけさせたい。図書室の新聞や新聞コーナーの記事を読む生徒は限られている。もっと新聞を読みたいと思わせるような仕掛けが必要であると痛感した。今年度の反省を生かし、次年度は課題がクリアできることを目指したい。



NIEを通して、社会事象を自分事として捉える

千葉市立新宿中学校 鹿子島 美里 片山 肇 清水 章寿

1 はじめに

本校は、令和3年度から令和4年度にかけてNIE実践校の指定を受け、実践を行ってきた。令和3年度の実践では、新聞に触れる機会をつくることで、新聞を読む習慣がない生徒の関心を引き出し、現代社会で起きている問題について考えさせることができた。

令和4年度は、前年度の取組を継続、発展させて、社会事象を自分事として捉え、日頃から考えさせるような取組を行った。

2 実践及び結果

(1)新聞を活用した授業実践

①社会科公民分野「選挙の意義と仕組み」

昨年度は衆議院議員選挙、今年度は参議院議員選挙が行われたため、選挙の意義と仕組みについて学習を行った後に選挙に関する新聞記事を用いて理解を深めさせた。

実際の新聞記事を用いることで、言葉だけで理解していたものがより明確化されるとともに、学習内容が自分たちと深く関わっていることを実感させることができた。さらに、衆議院と参議院の選挙制度の違いや、自分が住んでいる地域がそれぞれの選挙でどの選挙区に分類されているのか、比例代表名簿の順位はどのようになっているのか等、選挙に対する関心を高めさせるとともに、自らが選挙に関わることの重要性・必要性を考えさせることもできた。

②社会科公民分野「メディアリテラシー」

社会科「マスメディアと世論」の単元において、「新聞でメディアリテラシーを身につけよう」という学習

活動を実施した。新聞記事を用いて、以下の活動を行った。

○見出しや構成の比較

複数の新聞の一面を提示し、違いをノートに記述させる。

○理由の考察

書き出した違いについて、なぜこのような違いが生じるのかを考察させ、ノートに記述させる。

○グループワーク

4人班を作り、それぞれの違いや、なぜそのような違いが生じるのかについて発表を行う。

その後、疑問点や別の意見を相手に伝え、議論を行う。

生徒たちはこれらの活動を通して、新聞社の考え方や立場の違いから記事にする内容や論じ方に違いが見られることが理解できた。そして、世論の形成に新聞等のマスメディアが大きな影響を与えていることを理解するとともに、情報を鵜呑みにしてしまう危険性と情報を多面的・多角的に読み取ることの重要性を実感していた。

③1・3年総合「校外学習・修学旅行の新聞作成」

総合的な学習の時間において、旅行的行事の報告書を新聞形式で作成するという言語活動を行った。自分が学んだことや経験したこと、感じたことなどを新聞という手段を用いて他者に分かりやすく伝えるという活動である。

新聞作成の授業を実施する上で、生徒たちが普段新聞を目にする機会が減っており新聞作成のイメージが持ちづらいのではないかと考え、事前学習でサンプルを提示した。これを参考にすることで、

見直しをもって事前の準備ができていた。また、どんな内容にするかを事前に考えさせることで、旅行中はメモを取る姿も見られ、旅行後の新聞作成をスムーズに行うことができた。

作成した新聞は廊下に掲示した。さらに、審査用紙を配付し互いの新聞の審査を行った。審査は、①記事の文章が分かりやすく、学習の様子がよく伝わる②自分の考え、発見、感想等が十分に書かれ、独自性がある③見出しや題に工夫があり、印象的である④記事のレイアウトに工夫があり、見やすいという4つの項目を設けて行った。審査を行ったことにより、様々な新聞を熟読する生徒の姿が多々見られ、自分と異なる考えや工夫を知ることができた。

これらの活動を通して生徒たちは、情報発信や自己表現のツールとしての新聞の有用性を実感することができた。



(2) 新聞への関心を高める日常の取組

①「新聞掲示コーナー」の設置

図書館指導員とも協力し、図書室前や教室・廊下に新聞を掲示し、生徒たちが普段の生活の中で新聞に触れる機会を設けた。掲示する新聞については、新聞掲示係を決め、生徒の主体的な活動になるよう配慮した。掲示する記事は、生徒たちが関心をもつものや見出しで生徒たちの気を引くニュー

スを取り扱うように配慮した。多くの生徒が、記事や見出しに興味をもち、その内容を話題にし、自発的に話す姿が見られた。



②社会科全学年「定期テスト時事問題」

社会の定期テストでは、時事問題を出題している。図書室前の新聞などから出題することで、新聞への関心を高めるきっかけとした。また、単に話題となっているニュースだけでなく、授業で学んだ内容に関連しているものを優先的に出題することで、学習内容と実際の社会との関連についてより深く実感させる機会とした。

3 考察及びまとめ

2年間のNIE教育の実践を通して、生徒の新聞やニュースへの関心が高まり、現代社会で起きている様々な社会現象について、自分事として捉え、考えさせることができた。また、情報を多面的・多角的に読み取ることの重要性を実感させることができた。

現在、家庭の新聞の購読率が低く、授業での新聞の活用方法に難しい部分がある。しかし、関心のある情報だけを手に入れるのではなく、色々なニュースを目にすることができるのが、新聞である。次年度以降も新聞などを活用した授業を考え、生徒が新聞に触れる機会をつくり、現代社会で起きている問題について生徒に考えさせたい。

2年間のNIE実践を終えて

市原市立市原中学校 木下 和巳

1 はじめに

本校がある市原市は「中房総」とも言われるようですが、千葉県の中央部に位置しています。人口およそ27万人で、北部には東京湾に面した工業地帯と商業施設や住宅地が集まっています。南部は山間地域であり、市の中央を南北に養老川が縦断し中央部には田園風景が広がっています。少子化・高齢化も進み、生徒数も年々減少しています。日本の縮図のような市とも言えます。

市原中学校は昭和22年に開校、現在76年目です。学校教育目標は「人間力を高め、未来に向かい、たくましく生き抜く生徒」です。また本校には「市中スマイル憲章」が定められています。これは生徒会本部を中心に全校生徒で話し合って制定されたものです。「勇気」「あいさつ」「笑顔」をモットーに、生徒たちは日常生活を元気に送っています。生徒数は現在138名、学級数は各学年2学級ずつ、また特別支援学級が知的学級1つ、情緒学級1つ、全部で8学級の小さな学校です。位置は市の北部にあり、2つの団地(国分寺台、辰巳台)に挟まれた、田畑と山林の広がる学区で、親の代、祖父母の代もこの学校に在籍したという家庭も多い地域です。学区内には幼稚園2園、小学校1校、県立高校1校、私立高校1校、特別支援学校1校あり、様々な形で連携した取り組みを行っています。また、社会教育施設(ゼットエー武道場、市原歴史博物館)が隣接しています。徒歩数分という地の利を活かして授業や行事での積極的な交流や利用を図っています。

NIEの実践に取り組むに当たって、まず生徒たちが実際に新聞に触れる機会がどのくらいあるのか

を調べてみました。すると本校の現状として、新聞を購読していない家庭が6割、新聞を読まない生徒の割合が8割という結果がでました。インターネットから多くの情報を得ることが多い生徒にとって、新聞は身近なものとは言えない状況にあることがわかりました。

2 実践及び結果

(1)令和3年度の取り組み

①「新聞のしくみ」を知る

まずは新聞の見出しやレイアウトの工夫などの「新聞のしくみ」を知るところから学習を始めました。見出しの付け方や記事の配列の工夫を紹介し、見やすくわかりやすい紙面作りをしていることを学びました。その上で、修学旅行や校外学習で、活動のまとめを個々に、あるいはグループで新聞として作成することにしました。生徒は、「一番伝えたいことは何か」ということを意識しながら、それぞれが工夫を凝らして、見やすくわかりやすい新聞を作ることができました。



②新聞記事を話題とした講話

新聞を身近に感じてもらうことも必要だと考え各担任にお願いして、帰りの短学活での担任の講話に新聞記事を話題として取り上げてもらう機会を作るようにしました。その際、記事のコピーを示したり配付したりすることで、新聞を読む機会を作るように意識しました。

③教科での実践

令和3年度は3年生の公民で行いました。

3年生の社会(公民分野)では、この年に行われた総選挙に関する記事を取り上げました。選挙の仕組みを理解する上で、教科書に書かれている内容をより具体的に知り、よりリアルに感じることができたのではないかと思います。新聞を活用して内容が理解しやすくなり、わかりやすく学ぶことによりニュースで話題になっていることと学校での学習がうまくつながるようになる。学びがより深まる、ということを生徒も教師も実感できた学習でした。また、選挙の取り上げ方が新聞社によって異なることに気づかせ、メディアリテラシーについても学ぶことができました。



(2)令和4年度の取り組み

①「新聞のしくみ」を知る

今年度は1年生に実施しました。担任が電子黒板を活用して新聞のしくみを説明し、新聞形式のまとめ方に取り組みました。生徒は一人1台のタブ

レット端末を使って、見やすくわかりやすい新聞をつくることができました。

②授業での実践

今年度は3年生の国語で取り組みました。国語の学習内容でメディアリテラシーの必要性を学ぶところがありましたので、ここで実際に数社の新聞の社説を比較し話し合いました。新聞社の考え方によって書きぶりが異なることを実感し、生徒たちも興味を持って取り組んでいました。



③新聞記事の読み取り

昨年度の課題として、多くの記事に触れることで、読解力や思考力を高めるような取り組みをすること、日常のわずかな時間をうまく活用できるように、内容を考えて、継続的な取り組みをすることが挙げられました。そこで今年度は「読売新聞ワークシート通信」を活用してみました。毎朝10分間の読書の時間のうち、金曜日をこのワークシートに取り組む時間としました。初めは記事を読み取ることに四苦八苦する生徒がいましたが、徐々に慣れてきて、自分の考えを書き込むことができるようになってきました。短時間でも継続的に取り組むことが学習効果を高めることにつながっているということが実感できました。

3 成果と課題

(1)実践の成果

成果としては、次のことが挙げられます。

- ①新聞形式でのまとめをする際に、見出しや構成の工夫、一番伝えたいことは何かなど、新聞記事を意識して作成できる生徒が増えたこと。
- ②実際に新聞記事を比較することで、メディアリテラシーの必要性をより具体的に捉え考えることができたこと。
- ③ワークシートを活用した読み取りと記述の積み重ねで、自分の考えをわかりやすく書くことが少しずつできるようになってきていること。

(2)課題

課題としては次のことが挙げられます。

- ①新聞の確保(部数や種類)、教員側の意識の高揚と柔軟な思考が必要

今回、NIE実践校に指定していただいたことで、新聞各紙を定期的にそろえることができ、各社の比較ができました。授業で複数の新聞を活用する場合は、学校として教育活動にNIEをしっかりと位置づけて予算を確保し新聞を購入することが必要だと思います。

- ②指導する教員が柔軟な思考や発想で新聞を活用していくことが重要

自分の担当する教科の授業で使える記事、道徳で使える記事など、どの場面で活用できそうかという視点で新聞を斜め読みすることも大事ではないかと思っています。NIEに関することだけではないと思いますが、教員自身の感性を磨くことが大切です。

新聞学習とSDGs

松戸市立河原塚中学校 佐々木 淳・鎌田 純子

1 はじめに

本校は令和4年度からの2年間、NIE推進校の指定を受け、初年度の取組となる。

新聞学習を進めるにあたり、今年度の研究主題である「個の学びの深まりを見取る授業づくり～自己の学びの深まりを自覚できる学びの実現に向かって」を基として、指導案検討を行った。本校では今年度、SDGsの活動の一環として、性別による偏見をなくすために、『敬称を統一すること』や、『制服の標準服選択制』を促進している。ジェンダー平等を知識として深める学習や、その他の持続可能な社会の実現について、深く学べる内容とすべく、新聞学習を進めることは最適な機会であった。生徒には、「新聞は多くの人の校正を通過して、事実を世に伝えるための的確な文章表現で構成されている」と認識させて学習の始まりとした。

《新聞記事選別の様子》



2 実践状況

(1) 報告書書式：新聞形式

○ 上下段の二部構成

《上段》新聞記事の複数張り合わせ

《下段》① 新聞記事の要約

② 着目した理由

③ 記事の感想(編集後記)

(2) 委員会活動

○ 学習委員会-各学級に作業手順の説明

・SDGs項目確認の動画視聴

・新聞・用紙配付・書式説明

(3)総合的な学習の時間

SDGs「持続可能な社会の実現に向けて」の17項目の活動や、最新ニュースのSDGs関連記事を切り抜く。作業効率を考え、SDGs掲載記事は全て切り抜いた後に、班活動の中で、各自がテーマに関連した注目記事を探した。

3 考察及びまとめ

新聞学習を通して、文章構成はどうあるべきかや、記事を作成する順序や見出し、文字の大きさなどの構成を学ぶことができた。自分の考えを裏付けたり、説得力をあげるためには、事実や根拠に基づいた意見を書かねばならない。そのためには多くの予備知識をつける必要があることを学ぶことができたのは収穫であった。しかし、文章構成を身につけ、稚拙な表現を脱し、的確な表現で自分の考えを伝える文章作成までには、至らなかった部分もある。

《生徒作成の記事》



新聞記事の魅力は事実に基づいて検証された内容が、適切な表現を用いて言い表わされていることである。令和4年度の学力状況調査によると、「根拠を明確に書く」問題について、正答率が全体の45.5%であり、記述題3問中の内、一番低かった。本校でも記述を苦手とする生徒が多数派だ。少しでも、生徒たちの書く力を向上させるために、継続的な文章表現指導を行ってきた。特に、夏の作文では、「文法力、語彙力、表現力」について点数化し、細やかに添削を行った。「自分の考えが伝わる文章」を目指してきたが、多少の知識はついても、それらをまとめた全体の構成力に、課題が残る結果となった。

来年度は2年目となるので、新聞の文章構成を学び、また、語彙力を増やせる学習活動の検討や、情報の共有を通じての理解の深まりを見取る授業展開を考えていきたい。



新聞で多様な価値観を理解し合う

千葉県立国府台高等学校 大塚 功祐

1 はじめに

長崎原爆資料館の入り口に掲げられたメッセージにこんな一文がある。

核兵器、環境問題、新型コロナウイルス…世界規模の問題に立ち向かう時に必要なこと、その根っこは、同じだと思います。

自分が当事者だと自覚すること。人を思いやること。結末を想像すること。そして行動に移すこと。(後略)

生徒一人ひとりが当事者意識を持ち、多様な考えを受け入れ、将来をイメージし、行動できる成人となるために、様々なアプローチを行っている。その取り組みをする上で、新聞が大きな役割を果たしており、効果は大きいと考えている。以下、この1年間の実践報告をする。



2 実践状況

(1) 図書館のNIE

本校図書館の司書・大川信子先生を中心に積極的に活動している。

- ①図書館前の廊下に新聞コーナーを設置し、いつでも新聞を手にとって読めるようにした。
- ②図書館の掲示物に新聞記事を活用した。



(例) 18歳成人に関連した記事を紹介する。

- ③テーマを設定し、そのテーマに関連した記事を図書委員が切り抜き、スクラップにしている。総合型選抜などの小論文対策に役立てたい。

(2) デイバートに新聞

教科書にはない新聞の長所として、

- ①速報性…教科書ではカバーできない、タイムリーな話題を提供できる。
- ②多様性…新聞各紙を紹介することで、様々な価値観や考え方にふれることができる。

以上の長所を使って、1年生の「地理総合」、3年生の「政治経済」の授業でデイバートを実施した。

1年地理総合

「日本の再生可能エネルギーの割合を半分以上に高めるべし」

マイクロディベートと呼ばれるやり方で行う。4人組を作り、肯定チームと否定チームに分かれ議論する。

原子力発電所の是非に関する記事や再生可能エネルギーに関する記事等を両チームに提示し、ディベート前の準備に活用する。

3年政治経済

「ベーシックインカムを導入すべし」

「核兵器禁止条約に賛成すべし」

「夫婦別姓を導入すべし」

「外国人労働者（移民）を積極的に受け入れるべし」

4テーマ計8チームに分かれ、ディベートに向け準備をした。その際、関連記事を両チームに提示した。

1テーマ1時間でディベートを行い（計4時間）、他のチームは審判として参加した。

肯定チームと否定チームのどちらに説得力があったか一票を投じ、多数決で勝敗を決定した。

(3) 生徒の人生を変えた新聞記事

3月に卒業した速水大知さん。彼は1学年時に1枚の新聞記事に出会った。



それはブラジルがコロナ対策をめぐる争いが起きているという記事である。命か経済か、どちらを選択するのかというブラジル政府の混乱に彼は衝撃を受けた。

それから彼は夏休みにかけて自主的に「ブラジルと貧困」をテーマに調査研究活動を行った。コンクールや学校の課題だったわけではなく、自ら沸き立つ興味から研究した。

これを機に彼は法律や政治学に関心を寄せるようになり、3学年時に法学部への進学を決めた。「あの新聞記事との出会いがなければ今の自分はなかった」と彼は言う。

授業では定期的に新聞記事を提示するが、どれが生徒の心に刺さるのかは人それぞれである。だからこそ継続して、新聞記事を使って問題提起することで生徒の学びにつながるものと考えている。

3 まとめ

チョークアンドトークの授業でなく、生徒同士が対話する中で、様々な価値観を見出し認め合うことは、生徒の心に残る貴重な経験となっている。

最後の授業でアンケートをとり、心に残った授業を調査した。結果、毎年ディスカッションや意見交換の時間が上位に位置する。

そのアンケートに書いてくれた生徒の感想を紹介し、まとめとする。

- ・物事をいろいろな角度から見て考えるようになった。(男)
- ・社会科は暗記教科だと思っていたが、考えることが大事なんだ。(女)
- ・ニュースの表面だけを見ずに、背景も見ることの大切さを知った。(男)
- ・事実を覚えるだけでなく、なぜそうなったのかくわしく深掘りするようになった。(男)

- ・ 社会科は知識を覚えた者勝ちという認識が変わった。(男)
- ・ 社会科は暗記ではなく、つながりだ。(男)
- ・ 世界で起こった出来事を地理的な視点で考えたことがなかった。しかし、結びつけて考えられるようになった。(男)
- ・ 意見は十人十色。普段からもっと客観的に考えて生活してみようと思った。(女)
- ・ ニュースや新聞を見るのが楽しくなった。(女)
- ・ 少数の人の幸せのために、多くの人々が傷ついていると思うようになった。(女)
- ・ これまで世界の問題は自分達の生活にはあまり関係ないと思い、他力本願な姿勢だったが、世界の問題は我々の問題でもあると考えるようになった。(男)
- ・ 世界の見方が変わった。固定観念が変わった。自分で考える力がついた。(女)



NIE実践報告

千葉県立四街道北高等学校 公民科 内山 浩史
協力者 公民科1名、英語科1名、家庭科1名

1 はじめに

本年度より指定を受け、家庭科(保育、少子高齢化、SDGs関連記事)・英語科(The Japan News、朝日ウィークリー)・公民科で実践しました。以下、公民の実践例を2つ報告します。

2 実践状況

(1) 模擬投票 公民科、政治・経済(3年)で実施、(1学期)

新聞記事を使った参議院議員選模擬投票(比例代表のみ)です。

① ワークシート1

18歳選挙権に向けて -読んで考えて整理しよう- (抜粋)

(教科書P44~49、「私たちが拓く日本の未来」、清水書院ワークシート、新聞記事により作成)

●●● 選挙に行くために ●●●

隆史：投票に行ったほうがいいことは分かったけれど、候補者のなかからどういう基準で投票先を選べばよいか、自分ではよく分からないんです。

先生：なるほど。じゃあちょっと考えてみようか。たとえばあなたは、どのようなところを見て投票する人を選ぶだろうか？ いま、思っていることで答えてみよう。

作業1 (○を付けて下さい) あなたは、

ア 候補者の顔や声 イ 新聞やテレビの評判
ウ 友人の紹介 エ 選挙活動の熱心さ
オ 政党や政治家のホームページ カ SNS など
キ その他()を
参考に選ぶ。

先生：投票の基準がまったくないと困るよね。そういう時は候補者の所属する政党に注目して考えてほしいな。というのは、現代の議会政治では、政党単位で意見をまとめ、一致して行動することが多いからなんだ。政党は、考え方や意見が同じような人たちの集まりだからね。国政選挙がある時には、各党は必ずマニフェストや政権公約を発表する。これを投票前に手に入れて比較したり、新聞やインターネットに載る「まとめ」などで読んで比較してほしい。

憲子：聞いただけで難しそう！ 私たちでも読めますか？

先生：たしかにすべて読もうとするのは、大変だね。まず、今の自分にとって何が望ましい政策なのか、1つでも2つでもいいから、考えて欲しい。自分なりの「争点」をしぼって比較するんだ！

作業2 あなたにとって望ましい政策を考えると、重要と思うテーマを1つ選んで下さい。

ア 憲法・皇室 イ 外交・安全保障
ウ 暮らし・経済 エ 子ども・社会保障
オ エネルギー・農業
カ 新型コロナ対策・復興・その他

先生：今日は、資料(参院選政党公約一覧・東京新聞6月21日、毎日新聞ポートマッチ、朝日新聞ポートマッチ、読売新聞ポートマッチ、NHKポートマッチのいずれか)を見て、授業で学んだア~カなどのテーマについて、各政党がどのような政策を提案しているかチェックし

てみよう。

自分の意見に近い政策(いいね、実現して欲しい)に「○」、自分の意見と違う政策(ダメ、実現不可能など)に「×」、わからない・優先しない政策(何を言ってるかわからない・微妙)に「△」をつけてみよう。○が多い政党が支持政党だよ。A4のワークシートに記入し、友達と話し合ってみよう。

ワークシート2 (生徒提出用)

*どの党を支持したかで、評価することはありません。

① 私は

- ア 憲法・皇室 イ 外交・安全保障、
- ウ 暮らし・経済 エ 子ども・社会保障
- オ エネルギー・農業
- カ 新型コロナ対策・復興・その他 のうち

()が重要で、資料の中の○○党の公約にある・・・を実現して欲しいと思っています。

② 他の方の意見(2人以上の意見を書く)では

○○の政策を重要視し、投票するという人もいました。理由を聞いたところ・・・だからだそうです。

- ・()さん・・・()を重視 理由
- ・()さん・・・()を重視 理由

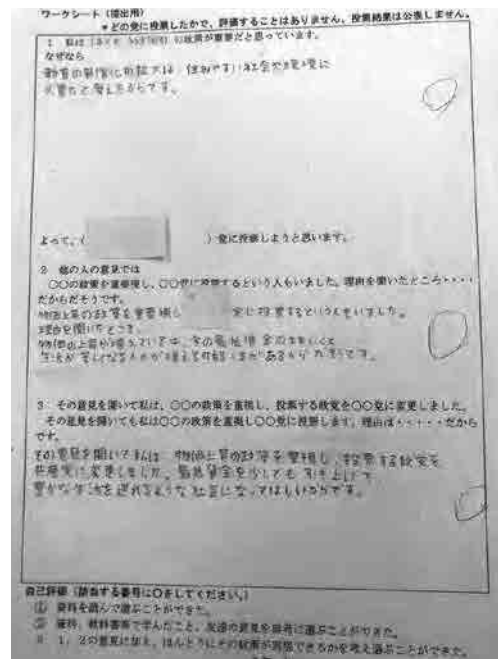
③ その意見を聞いて私は、○○の政策を重視し、投票する政党を変更しました。

その意見を聞いても私は○○の政策を重視し、1の政策を実現してくれる政党に投票します。理由は・・・だからです。

④ 自己評価(該当する番号に○をしてください。)

- A 資料を読んで選ぶことができた。
- B 資料、教科書等で学んだこと、友達の意見を参考に選ぶことができた。
- C A、Bに加え、ほんとうにその政策が実現できるかを考え選ぶことができた。

ワークシート例



(2) 時事問題レポート発表

公民科、政治・経済(3年)で実施、(3学期)

① 目的

新聞記事(時事問題)を通して、現代の社会的事象に対する関心を高め、資料を適切に収集し、事実を正確にとらえ、適切に表現する能力と態度を育てる。

② 方法

新聞記事を見て、

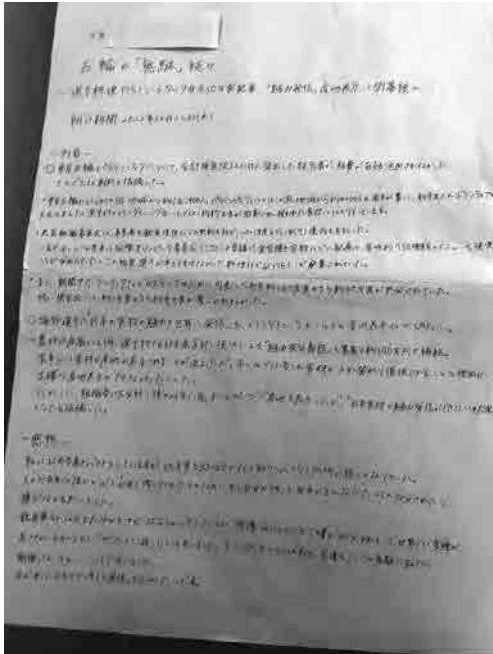
- ア その記事の見出し、ニュースソース(○○新聞など)、日付内容(教科書の記載があればそのページを明記、わかりやすく説明)
- イ 感想・意見をまとめ、発表する。
- ウ 用紙はA3サイズ。表に記事をはり、裏面にア、イを記入。(授業でスマートフォンとプロジェクターをつないで発表)

④ 評価

- A 見出し、内容、感想・意見を入れて、ていねいにわかりやすく書くことができた。
- B 見出し、内容、感想・意見を入れて、ていねいにわかりやすく発表できた。

C 見出し、内容、感想・意見(自分の経験など)を入れて、ていねいにわかりやすく3分間発表できた。

ワークシート例



4 考察

新聞の政党比較表や投票用WEBサイトを比較することで、資料を読んで資料を活用する力や思考力判断力がついてきています。また、政治的中立が求められている教員にとって、模擬投票を行うための教材として新聞(新聞WEBサイトを含む)は適当であり、できれば複数の新聞社の政党の主張比較表を使用するとよりよい教材となると思います。

また、時事問題レポート発表では、90%以上の生徒が新聞記事(時事問題)を通して、現代の社会的事象に対する関心を高め、資料を適切に収集する力が身についてきています。また事実を正確にとらえことで、より具体的に適切に表現する能力が身についてきています。



3 結果

(1) 参議院選模擬投票(比例代表のみ)

生徒の自己評価(生徒211人で実施)

A62% B30% C8%

自己評価の結果から、新聞という資料を比較し、他者の考えを聞き、考えながら政党を選ぼうとする主権者としての意識が高くなっていることがわかります。

(2) 時事問題レポート発表

生徒の自己評価(生徒208人で実施)

A30% B58% C12%

自己評価の結果から、資料(新聞)の内容を理解し、わかりやすく他者に説明し、自分の考えを発表する力が(1)を実施した1学期より伸びています。

NIE実践報告

千葉県立土気高等学校 酒井 将仁

1 はじめに

本校は今年度より指定を受け、NIEを実践することとなりました。まず生徒が実際にどれくらい新聞を購読しているのかアンケートをとると、定期的に新聞を読む生徒は各クラス2名から3名程度であり、ほとんどの生徒は新聞を読まず、スマートフォンやテレビでニュースを見るところでした。このことから、生徒にとって新聞は身近なものではなく、書いてある内容が難しいという印象を持つ生徒が多いと感じました。

2 実践状況(3年生)

(1)新聞を読んでみる

1学期には、新聞を読むこと自体に苦手意識を持っている生徒が多いため、まずは新聞をどうやって読むかということを授業で扱いました。新聞の見出しやリード文など新聞の構成を把握することで、新聞が実は読みやすくなるように様々な工夫がされていることを生徒は理解することができました。そして1時間を使い、手に取った新聞の中から気になる記事を選択しました。当時の話題であった、ウクライナに関するニュースを中心に、様々なニュースを取り上げ、自分のワークシートにまとめました。

(2)新聞掲示コーナーの設置

少しでも多くの生徒に新聞に対する興味をもってもらうために、図書室の脇に新聞を置いた棚を設置し、話題となっていたニュースの記事を掲示しました。廊下を歩く生徒が時々足を止めて、記事を見ていたり、新聞を手にとったりする姿も見られ、興味関心を持つ生徒も出てきたように思います。



(3)円安・物価高について考える

3学期には2ヶ月間、計8社からの新聞を送っていただき、10月、11月に日本中でニュースになっていた、「円安・物価高」について新聞で調べてみました。円安、物価高に関する記事を40程、教員側で抜き出し、生徒を4～6人のグループに分け、それぞれに6～7の記事を配布しました。生徒には4つの観点「円安、物価高の現状」「それぞれの原因」「それぞれのメリット、デメリット」「対応策」について調べるように指示をし、プリントにまとめました。その後、まとめたことをそれぞれ黒板に書き出し、全員で調べたことを共有する時間をとりました。分からない単語については電子辞書を使って調べたり、生徒同士で教え合ったりする姿も見られました。各班から出た意見の一部は以下のようになっています。

・物価高の現状

衣料品や食品の原材料が高騰している。

スマートフォンなどの価格水準が上がっている。

9月の東京都区部の消費者物価指数が前年同月比2.8%上昇 など



・物価高の原因

コロナウイルス感染拡大による貿易の停滞
 円安による輸入品の価格高騰
 ロシアのウクライナ侵攻 原油の供給不足による原油価格の高騰 など

・物価高のメリット、デメリット

物価が上がると、商品を買わなくなってしまう
 生活が苦しくなる
 小麦粉の価格が上がり、代わりに米が買われるようになった など

・物価高の対応策

企業は商品のサイズを変えたり、ブランド化を図っている
 賃金を上げるために政府はリスクリングに1兆円使うと言っている
 給付金を支給する自治体もある
 輸入品に頼るのではなく、国内に生産拠点を移す会社もある など

・円安の現状

10月14日に1ドル=148円86銭となり、約32年ぶりの安値を更新した など

・円安の原因

日本とアメリカの金利差が影響している
 日本銀行の金融緩和
 アメリカが金利を上げている など

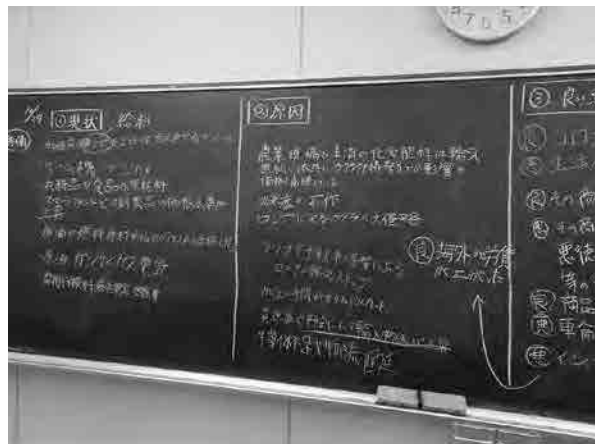
・円安のメリット、デメリット

日本に海外旅行で外国の方が来やすくなる
 外国から日本に来る労働者が減る
 輸入品の価格が上がる など

・円安の対応策

日本銀行による為替介入
 FRBは利上げを続ける など

班によって読んでいる新聞記事が異なるため、他の班の発表から新たな発見を得ることができたり、自分の調べたことと結びつけて捉えたりすることができたのではないかと思います。その一方で、読み取るのが難しい内容の記事もあり、手こずっている生徒も見られました。新聞を使用した授業のあとには、講義形式で物価の決まり方や円安、円高について説明しました。どちらも需要と供給のバランスが原因になっていることに触れ、新聞記事から読み取ったこととつながっていることを強調して授業を行いました。



3 まとめ

授業後にアンケートをとった結果を見ると、以前よりも新聞に興味や関心を持った生徒が196人中130人と増え、「見出しだけで内容が分かったり、色々な情報がのっていたりして、スマートフォンで記事を読むのとは違った見方ができた」や「新聞は難しいと思っていたが、自分の興味のある分野について調べ

る材料になりそう」などの感想を残す生徒もおり、授業で学んだことが実生活と結びついているという実感を持つことができたのではないかと思いました。しかしながら、実際に授業を行ってみて、新聞のような、量のある文章を読み慣れていない生徒が多くいるように改めて感じました。

多くの生徒は普段からTwitter、インスタグラムなどを利用していると思いますが、それらに出てくる文章は非常にコンパクトにまとめられており、そのような文章になれている生徒は、なかなか新聞の文章が頭に入っていないように感じました。しかし、時間をかけて読んでみたり、授業で学んだことを生かしたりすれば、読み取ることができると気づいた生徒もおり、今後情報を得る手段の一つとして利用してほしいと思います。

来年度に向けての課題としては、今回の実践では新聞を見比べることができなかつたので取り入れてみたいと考えています。そこから、同じニュースでも見方などによって、伝え方が違うということにも気づかせたいと思います。また、今回は教員側からテーマを提示し、記事も教員側が選びましたが、生徒たちに自分の関心のあるテーマを決めさせて、クラスで一つのテーマについて調べたり、記事も自分たちで探したりすることなどをさせてみたいと考えました。そのためにも普段から、新聞だけにかかわらず、文章やデータを読むことを取り入れ、必要な情報を探し出す力などを身につけさせたいと思いました。

2022(令和4)年度N I E実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL / FAX	備考
1	千葉県立国府台高等学校	臼井 武彦	大塚 功祐	〒272-0827 市川市国府台2-4-1	047-373-2141 047-373-7902	2021・ 2022年度
2	香取市立新島中学校	鈴木 康祐	松井 初美	〒287-0816 香取市佐原ノ4428	0478-56-0702 0478-50-3090	2021・ 2022年度
3	市川市立宮久保小学校	鷺崎 和也	石川 剛士	〒272-0822 市川市宮久保5-7-1	047-371-2747 047-371-2748	2021・ 2022年度
4	千葉市立新宿中学校	石川 英明	鹿子島美里	〒260-0025 千葉市中央区問屋町1-73	043-241-5887 043-244-5946	2021・ 2022年度
5	市原市立市原中学校	米沢 久志	木下 和巳	〒290-0011 市原市能満1450	0436-41-3424 0436-42-2664	2021・ 2022年度
6	習志野市立津田沼小学校	笹生 康世	金井 達也	〒275-0016 習志野市津田沼4-5-2	047-454-1326 047-454-1327	2021・ 2022年度
7	野田市立北部小学校	木村ひろ子	宇田川貴大	〒278-0046 野田市谷津25-1	04-7122-2748 04-7122-2679	2021・ 2022年度
8	酒々井町立酒々井小学校	中村太一郎	藤川 敬介	〒285-0927 印旛郡酒々井町酒々井203	043-496-1041 043-496-4701	2021・ 2022年度
9	長柄町立長柄小学校	富永 裕之	織田 純子	〒297-0206 長生郡長柄町山根1619	0475-35-3105 0475-35-5472	2021・ 2022年度
10	千葉県立四街道北高等学校	米沢 努	内山 浩史	〒284-0027 四街道市栗山1055-4	043-422-1788 043-424-3937	2021・ 2022年度
11	市川市立鬼高小学校	早川 淳子	吉田美紗希	〒272-0015 市川市鬼高2-13-5	047-335-0304 047-335-0305	2022・ 2023年度
12	香取市立佐原小学校	八木 達彦	川島 京子	〒287-0003 香取市佐原ノ1870	0478-52-2044 0478-54-7063	2022・ 2023年度
13	船橋市立芝山東小学校	細野 正子	高橋 若奈	〒274-0816 船橋市芝山3-19-1	047-464-3423 047-464-3424	2022・ 2023年度
14	松戸市立河原塚中学校	荒木 美穂	佐々木 淳	〒270-2254 松戸市河原塚190	047-391-6161 047-391-8669	2022・ 2023年度
15	白井市立白井第一小学校	坂野 仁	有田 英司	〒270-1431 白井市根105番地	047-492-0513 047-492-3006	2022・ 2023年度
16	鴨川市立天津小湊小学校	桂 幸一	粕谷 賢二	〒299-5503 鴨川市天津1166	04-7094-0104 04-7094-0607	2022・ 2023年度
17	横芝光町立日吉小学校	石川 豊計	石井 浩人	〒289-1701 山武郡横芝光町篠本5177	0479-85-1234 0479-85-1420	2022・ 2023年度
18	千葉県立土気高等学校	越川 淳	酒井 将仁	〒267-0067 千葉市緑区あすみが丘東2-24-1	043-294-0014 043-295-1863	2022・ 2023年度
19	千葉市立磯辺第三小学校	吉川 則子	五十嵐裕一	〒261-0012 千葉市美浜区磯辺1-25-1	043-277-1021 043-279-4049	2022・ 2023年度

継続

新規

2022（令和2）年度 千葉県N I E推進協議会 役員

2022年5月1日 現在

会 長	藤 川 大 祐	千 葉 大 学 教 育 学 部 教 授
副 会 長	山 下 秋 一 郎	千 葉 県 小 学 校 長 会 会 長
副 会 長	櫻 井 比 呂 樹	千 葉 県 中 学 校 長 会 会 長
副 会 長	横 瀬 正 史	千 葉 県 高 等 学 校 長 協 会 副 会 長
顧 問	富 塚 昌 子	千 葉 県 教 育 委 員 会 教 育 長
顧 問	磯 野 和 美	千 葉 市 教 育 委 員 会 教 育 長
幹 事	酒 井 昌 史	千 葉 県 小 学 校 長 会 副 会 長
幹 事	酒 井 純	千 葉 県 中 学 校 長 会 副 会 長
幹 事	佐 藤 晴 光	千 葉 県 高 等 学 校 長 協 会 監 事
幹 事	井 上 宏 樹	千 葉 県 特 別 支 援 学 校 長 会 副 会 長
幹 事	神 田 み の り	千 葉 県 教 育 庁 教 育 振 興 部 学 習 指 導 課 主 幹
幹 事	溝 口 真	千 葉 県 教 育 庁 教 育 振 興 部 学 習 指 導 課 指 導 主 事
委 員	松 田 京 平	朝 日 新 聞 社 千 葉 総 局 長
委 員	斎 藤 浩 淳	産 経 新 聞 社 千 葉 総 局 長
委 員	安 藤 淳 巳	東 京 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	真 鍋 正 巳	日 本 経 済 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	鳥 羽 田 繼 之 豊	日 刊 工 業 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	長 谷 川 豊 一	毎 日 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	小 布 施 祐 哉	読 売 新 聞 社 千 葉 支 局 長
委 員	依 田 直 哉	時 事 通 信 社 千 葉 支 局 長
委 員	佐 久 間 護 介	共 同 通 信 社 千 葉 支 局 長
委 員	佐 藤 大 介	千 葉 日 報 社 編 集 局 長
監 査	(原則、各新聞社による九社会幹事)	
アドバイザー	松 井 初 美	香 取 市 立 新 島 中 学 校 教 諭
アドバイザー	武 藤 和 彦	市 川 市 立 妙 典 中 学 校 初 任 者 指 導 教 員
アドバイザー	石 川 剛 士	市 川 市 立 宮 久 保 小 学 校 教 諭
アドバイザー	芳 賀 裕 美	市 川 市 立 東 国 分 中 学 校 教 諭
アドバイザー	大 塚 功 祐	千 葉 県 立 国 府 台 高 等 学 校 教 諭
アドバイザー	磯 貝 真 規 子	私 立 千 葉 敬 愛 高 等 学 校 教 諭
アドバイザー	瀬 和 真 一 郎	松 戸 市 立 松 戸 高 等 学 校 教 諭
アドバイザー	木 村 早 苗	私 立 茂 原 北 陵 高 等 学 校 講 師
アドバイザー	流 雄 希	浦 安 市 立 美 浜 北 小 学 校 教 諭
アドバイザー	富 永 加 代 子	市 川 市 立 百 合 台 小 学 校 非 常 勤 講 師
事 務 局 長	安 原 直 樹	千 葉 日 報 社 読 者 サ ー ビ ス 室 長

2023(令和5)年度N I E実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL / FAX	備考
1	香取市立新島中学校	鈴木 康祐	松井 初美	〒287-0816 香取市佐原ノ4428	0478-56-0702 0478-50-3090	2021・ 2022・ 2023年度
2	市川市立鬼高小学校	黒岩 大二	吉田美紗希	〒272-0015 市川市鬼高2-13-5	047-335-0304 047-335-0305	2022・ 2023年度
3	香取市立佐原小学校	葛生 毅	石井英理子	〒287-0003 香取市佐原イ1870	0478-52-2044 0478-54-7063	2022・ 2023年度
4	船橋市立芝山東小学校	清水 晴子	鈴木 郁衣	〒274-0816 船橋市芝山3-19-1	047-464-3423 047-464-3424	2022・ 2023年度
5	松戸市立河原塚中学校	石橋 功	鎌田 純子	〒270-2254 松戸市河原塚190番地	047-391-6161 047-391-8669	2022・ 2023年度
6	白井市立白井第一小学校	岩崎 順子	久本 誠一	〒270-1431 白井市根105番地	047-492-0513 047-492-3006	2022・ 2023年度
7	鴨川市立天津小湊小学校	谷 智恵	佐久間大樹	〒299-5503 鴨川市天津1166	04-7094-0104 04-7094-0607	2022・ 2023年度
8	横芝光町立日吉小学校	伊藤 玲子	石井 浩人	〒289-1701 山武郡横芝光町篠本5177	0479-85-1234 0479-85-1420	2022・ 2023年度
9	千葉県立土気高等学校	齋藤 俊介	酒井 将仁	〒267-0067 千葉市緑区あすみが丘東2-24-1	043-294-0014 043-295-1863	2022・ 2023年度
10	千葉市立磯辺第三小学校	岡田 直美	五十嵐裕一	〒261-0012 千葉市美浜区磯辺1-25-1	043-277-1021 043-279-4049	2022・ 2023年度
11	千葉市立貝塚中学校	山口 鉄也	小林 瑞希	〒264-0020 千葉市若葉区貝塚1-7-1	043-231-7077 043-232-4937	2023・ 2024年度
12	八千代市立大和田西小学校	島津 智恵	川上しずく	〒276-0046 八千代市大和田新田409番地3	047-450-2098 047-450-9743	2023・ 2024年度
13	我孫子市立湖北小学校	長田 英一	園 陽平	〒270-1122 我孫子市中里95	04-7188-1002 04-7188-3312	2023・ 2024年度
14	匝瑳市立豊栄小学校	角田 直彦	岩田 啓佑	〒289-2147 匝瑳市飯倉1847	0479-72-0531 0479-70-1322	2023・ 2024年度
15	御宿町立御宿中学校	吉田 誠	石井 裕子	〒299-5103 夷隅郡御宿町新町68	0470-68-2101 0470-68-2813	2023・ 2024年度
16	袖ヶ浦市立中川小学校	粕谷 久恵	伊大知里枝	〒299-0236 袖ヶ浦市横田2583番地	0438-75-2015 0438-75-6717	2023・ 2024年度

継続

新規

2023（令和5）年度 千葉県N I E推進協議会 役員

2023年5月1日 現在

会 長	藤 川 大 祐	千葉大学教育学部長・教授
副 会 長	酒 井 昌 史	千葉県小学校長会会長
副 会 長	日根野 達 也	千葉県中学校長会会長
副 会 長	佐 藤 晴 光	千葉県高等学校長協会副会長
顧 問	富 塚 昌 子	千葉県教育委員会教育長
顧 問	鶴 岡 克 彦	千葉市教育委員会教育長
幹 事	中 田 邦 明	千葉県小学校長会副会長
幹 事	大 矢 孝 之	千葉県中学校長会副会長
幹 事	河 野 安 勝	千葉県高等学校長協会監事
幹 事	伊 藤 康 弘	千葉県特別支援学校長会副会長
幹 事	田 中 宏 知	千葉県教育庁教育振興部学習指導課主幹兼義務教育指導室長
幹 事	鈴 木 加 奈 子	千葉県教育庁教育振興部学習指導課指導主事
委 員	佐々木 健	朝日新聞社 千葉総局長
委 員	斎藤 浩	産経新聞社 千葉総局長
委 員	安藤 淳	東京新聞社 千葉支局長
委 員	佐藤 大 和	日本経済新聞社 千葉支局長
委 員	鳥羽田 継 之	日刊工業新聞社 千葉支局長
委 員	伊藤 一 郎	毎日新聞社 千葉支局長
委 員	小布施 祐 一	読売新聞社 千葉支局長
委 員	依田 直 哉	時事通信社 千葉支局長
委 員	正村 一 朗	共同通信社 千葉支局長
委 員	佐藤 大 介	千葉日報社 編集局長
監 査	(原則、各新聞社による九社会幹事)	
アドバイザー	流 雄 希	市川市立平田小学校教諭
アドバイザー	石 川 剛 士	市川市立宮久保小学校教諭
アドバイザー	富 永 加代子	市川市立宮久保小学校非常勤講師
アドバイザー	武 藤 和 彦	市川市立妙典中学校初任者指導教員
アドバイザー	松 井 初 美	香取市立新島中学校教諭
アドバイザー	大 塚 功 祐	千葉県立国府台高等学校教諭
アドバイザー	瀬 和 真一郎	松戸市立松戸高等学校教諭
アドバイザー	磯 貝 真規子	千葉県立佐原高等学校非常勤講師
アドバイザー	木 村 早 苗	私立茂原北陵高等学校講師
事務局 長	工 藤 新 一	千葉日報社読者サービス室長

千葉県 NIE 推進協議会事務局
(千葉日報社内)

〒260-8628 千葉市中央区中央 4-14-10

TEL 043-227-1139 (NIE直通)

TEL 043-227-4654 (読者サービス室)

FAX 043-224-3662